
執事ハヤテの日々

悪靈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

執事ハヤテの日々

【著者名】

ZZマーク

ZZ697D

悪魔

【あらすじ】

「いつもの『』とぐ、仕事をしていると突然、ナギが現れて・・・

1話（前書き）

少しづながらなるかもしけませんがぜひ見守ってください

三千院家で働く執事綾崎 ハヤテ

いつものごとく、部屋の掃除をしていてハヤテはふうと息を吐き、「今日も静かで気持ちなあ～」

ところと共にアレギみの主ナギが入ってきた。

「アレギみなんだ？アレギみつて」

つまり、HI・KI・KO・MO・RIつてやつだ

「ひきこもり言つな！…」

「お嬢様、誰と話しているんですか？」

「あ、いや・・なんでもない」

「そうですか・・・それよりなにかようですか？」

と聞くと

「つむ、ハヤテ！一つ質問していいか？」

と言つたナギに

「あ、はい・・いいですよ」

とハヤテは笑顔で答えた。

このあと、自分に事件が起つるとも知らずに・・・

「じゃあ、ハヤテは誰のことが一番好きなんだ？」

これにはハヤテも驚いたが

「えーと、一人答えないといけませんか？」

と聞いた

「つむ、1人答えてくれ」

その言葉に考え、悩んでいたが

「僕は、マリアさんが好きです」

とはつきり言つた。

その言葉にナギは唖然としていたが、

やがて怒っているのか、泣いているのか分からぬ声で

「ハヤテの、ハヤテの・・バカーー」

そういうて物を投げつけた後、クラウスを呼び

「やはりクラウスの言うとおり新しい執事を雇おう

ハヤテ、お前はクビだ」

そういうとナギはクラウスと共に部屋を出て行こうとした

「ちょっと、待ってください・・クビにしないでください」

「うるさい、お前はクビだ出てけ~」

そういうとナギは部屋を出て行つた。

ハヤテは啞然としていた

1話（後書き）

少し短かつたかな？まあこの後もこんな調子でつづきもやのでよろしくお願いします

ナギにクビにされ唖然としている
マリアがすまなそうな顔をして現れたので・・・

ハヤテは我に返つてマリアに田を向けました

マリアは

「すみませんね、ハヤテ君」

「いえ、マリアさんがあやまらなくつたでいいですよ
それよりどうなつてているんですか?」

「実は・・・」

マリアは重い口を開け、
全てをハヤテに話した。

クラウスとナギが執事のことケンカしていたこと
その決着をつけるためナギが質問し
ハヤテの回答によつて

どうするかを決めること

そして、全てを聞いたハヤテは自室に戻り
屋敷を出て行く準備を始めた。

幸い荷物が少なかつたため準備はすぐ終わつた

マリアは心配して

「私からも伝えますからやめない方がいいん
じゃないですか?」

と言つて、引きとめようとしたがハヤテは
「いいんですよ。僕はお嬢様を騙していたわけですし
それにお嬢様が出てけと言つてはいるんですけどからいいんですよ

ハヤテは何処となく悲しい顔をしていたがマリアにお別れをして
屋敷から出て行きました。

ある一つの言葉を残して・・・

「少しの間だけでも幸せをありがとうございますお嬢様・・・」

しかしそんなことを知らないナギは

三千院家の力でハヤテを社会的に葬つた。

つまりバイトや職はできないということだ。

「ハヤテめ、私を裏切ったことを後悔するがいい」とナギがいつていきました

ハヤテはどうなるのか！？

死ぬのか？

それは次回に続きます

2話（後書き）

少し短いかな・・
次回、重要なオリキヤラがでてきます
また、ハヤテもでてきます

ハヤテが屋敷を出てから約1時間が経った。クラウスが新しい執事を連れてやつてきた。

「どうも、こちらじくお願ひします」

彼の名前は堺 煉^{れん}。

あらゆる武術を使える世界でも

有名な執事である。無論オリキャラである。

「うむ、頼むぞ」

「はい、お任せください」

その様子にクラウスも気分が良さそうだ。

しかし、マリアだけは違った目で見ていた。なぜならクラウスも知らないが煉はこれまで何度も問題を起こして執事をクビになっていたからだ。

そのころ、ハヤテはどうと借金取りに追いかけられていた。

その理由は、ナギがいつかの借金取りにハヤテを売つていたからである。

しかし、いくら借金取りといえどハヤテに追いつけるわけもなくハヤテはあつという間に逃げ切っていた。

しかし、問題は三千院家でも起こっていた。
雇った執事の煉が早くも問題を起こしていた。
さうに、仲直りのメドが立たず困り果てていた。

その頃、ハヤテは借金取りから隠れていた。
そして、息をつくと、

「お嬢様、大丈夫かな～」

こんな状況でよく人の心配なんかできるなど
思いつつも、ハヤテの咳きをしばらく聞くことにじょうぶ。

「あー、今頃執事を雇っているんだろな」

「でも、お嬢様のことだからもう執事の人と
ケンカしてるかも」

といつて、クスッと笑っていました。

なんという洞察力。

「まあ、そんなこんなで仲良くなっているんだろうなあ
とこうとハヤテは寝てしまっていた。」

そんな彼に近づく怪しい影。

はたしてその影の正体とは！？

3話（後書き）

皆さん、どうでしたか？
少し短かつたような気もしますが、
次回はハヤテが変わります。
あとオリキャラもでてきます

まあ、いろんなことがあったその翌日。ナギと煉は一応仲直りをしていた。

「いいか、これからはもっとしっかりしてくれよ」

「わかりました」

「しっかりやつてくれないと困るだからな」

「はい」

「でも、お嬢様も負けず嫌いですねえ」

「負けず嫌いではない！！」

そんな会話をしていると、ある人物が入ってきた。

「朝からうるさいなお前ら・・・」

「あ、竣」

「竣兄さん」

「峻様」

とナギ・マリア・クラウスがいった。

彼は三千院 竣。ナギの兄である。

彼は入ってくるなり、

「ん？誰だそいつ、ハヤテはどうした？」

その言葉にナギ達は黙つた。

煉にはなぜ黙つたかわからなかつた。

ハヤテは竣にも執事をやつていたし、竣はハヤテのことを信頼している。

さらに、ハヤテが執事になることを最初に認めていた。

だから、竣に無断でハヤテをクビにした

とはとてもじゃないが言えなかつたのだ。

しかし、そんなことを知らない煉は

「前の執事ならやめましたよ」

その言葉に、峻は拳を震わせて

「マリア、それは本当か？」

マリアは、ハヤテに話したことと回じいことを話しました。

全てを聞くと、竣はナギとクラウスの方を向きました。

「「めんなさい、」

と謝りましたが、竣は少しうなだれたようにしながら、

「この手紙は本当だつたのか・・・・・

「なんの手紙なの？竣」

「ハヤテからさ」

というと竣は椅子に座り、その手紙を読み始めた。

その内容は短いながらも感謝の言葉でいっぱいでした。

読み終えると、竣は

「どんなんに、ハヤテがお前に感謝してたかお前はわからんだろうな
たわいもない理由で人の命を捨てるなんてお前はハヤテの親
と同じだ！！」

そういう終わつたあと、峻は部屋を出て行きました。

その頃、三千院家へ向かっていたヒナギクは
途中でハヤテを見つけました。

声をかけようとしたらが様子が違います。

なぜなら、いつもと違う服を着て

後ろに黒服の3人をつれていたからである。

ハヤテは車に乗つていつたので
ヒナギクは急いで向かいました。

「なんだつて？ハヤテが？」

「ええ、そうよ」

そういつたヒナギクは窓を見上げていました。

竣はナギたちを連れてハヤテを探すことになりました。

4話（後書き）

どうでした？

次回は戦いシーンなどが入ると思います。

5人（竣、ナギ、マリア、ヒナギク、煉）はハヤテを探していた。

「クソツ、どこにいったんだ？」

竣は苛立つていたが、

「たぶん、ここ近くにいると思いますよ」とヒナギクがいった。

すると、田の前に先ほどの黒服3人を発見した。

「あ、ハヤテ君といつしょにいた3人」というと竣は声をかけた。

「お前ら、ハヤテを見なかつたか？」

「あ？ しらねえな」

という3人は日本刀を持って襲つて來た。

竣と煉はあつという間に倒した。

「さあ、ハヤテの場所を教えてもらおつか」と竣がいうときなり向こうから声が聞こえた。

「おい、なにやつてんだお前ら」「ん？」

「りやーびつくりだな」というと近づいてきた。

煉はいきなり前に出て戦つ構えをした。

「お？ やるのかお前

とこうとこきなり空間が変わった。

「ここは・・閉鎖空間か？」

「ほ、これが分かるとはな

とこうとハヤテは早くやろうぜといった。

煉は正宗を出した。

「あれ？ それは確か正宗だな」

しかし煉はそれを真剣へと変えた。

「ほーう、真剣か・・ならば」「
といふと剣を出した。

「それはなんだ？」

「これはな大包平だ」

大包平は世界でもっとも強い真剣である。
そういうとハヤテは前に飛び出し、
あつという間に煉を斬った。

「安心しな、閉鎖空間での出来事は
現実世界には影響しねえからよ」
といふとハヤテは閉鎖空間を閉じた。

ハヤテは閉鎖空間を出るとそのまま
向こうへ歩いていく。

「おー、待て」

ナギが叫んだ。

すると、煉は起き上がり

「待て」

と言つたが、ハヤテは

「煉とか言つたな・・お前も気付けな
いつあのわがままな主に捨てられるか分からんからな

とこつとハヤテはそのまま去つていった。

5話（後書き）

どうでしたか？

次回でなぜ変わったのかを出します
ありきたりになつてきてるかもしないので
つまらないかも知れませんが
これからもお願いします

竣達はハヤテが去ったあとすぐ屋敷に帰ってきた。

ちなみに、煉は勝負に負けたショックから執事を辞めていた。

帰つて来てはいいがナギはさつきから黙り込んでいた。

ハヤテにいわれた言葉が頭から離れず

マリアらの言葉はナギにまつたく聞こえていなかつた。
「（心中）やはり私は間違つたことをしたんだろう。
ハヤテに悪いことをしたな・・どうすればいいんだ」
ナギは心中で自分をいじめていた。

「私は悪いやつだダメな奴なんだ・・

人の気持ちを考えず行動するバカ者なんだ
私はこの世から消えた方がいいんだ。」

そう考えていると、自分を呼んでいる声がした。

ふと、我に返ると、マリアがほつとした顔をしていた。
峻は、黙つていたがこう言つた。

「ナギ、自分で責任を背負うな・・

あれはハヤテじゃない。分からぬが俺には
なんとなくそう感じた」

確かに、今までのハヤテとは違つた。

そのあとナギ達は黙つていたが、いきなりSPが入つてきた。

「お嬢様方、先ほどこのような手紙が届いてました」

それを聞くと峻は手紙を受け取りしばらく読んでいましたが

「なんてこつた、これはやばい

「何が書いてあるの？竣

とマリアが聞いた。

「これを見てくれ
「三千院家の方々へ

久しぶりだな・・・・・よくもクビにしててくれたな

お前らは許さない・・・だから、お前らは襲わんが
お前達の親族、友達など親しい者達を襲つていく。
何もせず、親しい者が次々倒れてく姿を見ているがいい

綾崎 ハヤテより

「急げ、帝のじいさん、愛沢家、鷺宮家、それとヒナギクなど
に伝える。」

ナギはしばらくその場から動けなかつた。

その頃、愛沢咲夜と鷺宮伊澄は三千院家へと向かつていた。
「まあまあ、ウチが連れてつてあげるさかい心配せんでええよ」
「別に咲夜に連れてつてもらわなくとも・・・・・」

すると、伊澄は気配を感じたのか後ろを向いた。

その瞬間、前に現れたハヤテが咲夜を剣で斬つた。

伊澄は前を向きとつさに相手を見たがハヤテは見られるとすぐ
逃げていつた。

「咲夜、咲夜・・起きて」

「うう・・・、伊澄さんなにがあつたんや・・・」

咲夜は血がどんどんでていた

このままでは、まずいと思つた瞬間三千院家のS.P達がやつてきた

「大丈夫ですかー」

「咲夜が怪我をしています」

伊澄は運ばれた咲夜と一緒に三千院家へ向かつた。

「なに!?咲がやられただと」

「ええ・・、幸い傷は浅かつたみたい」

「よかつた・・・

安心したような顔を見せていたが、

「でも、どうしたの？」

と言つ伊澄の言葉にまた顔が暗くなつたが

伊澄に全てを話した。伊澄は聞いたあと、

先ほど、見たことを話した。

「ナギ、ハヤテ様は悪霊に乗つ取られてるのよ」

その言葉にナギは驚いた。

「本当か！？」

「ええ、本当よ。ハヤテ様は何もしてないのよ」

「でも、それをまず言つたということは伊澄にも除霊できんのだな」と竣が言つた。ナギは伊澄が靈が見えたり退治できたりするのを知つています。

「ええ、そなんです」

「とにかく、それが分かつただけで十分だ
どう対処するかはあとで考へることにしてヒナギクも呼んで
ここに皆でいれば攻撃できないだろ。」
と言つた竣に皆は賛成した。

その30分後、竣の部屋に集まつていた。

6話（後書き）

皆さん、どうですか？

今まで短かったので今回は少し長くしてみました。
まあ、展開が微妙だし、脱字誤字はありますが
かんべんしてください。

次回はなるべく脱字誤字がないようにやつていきます

三千院家に皆が集まつた頃、ハヤテは屋敷の近くにいた。

「ちつ、全員で固まつたか・・・

「これじゃ攻撃できんぜ。どうするかな」

さすがに、攻め込むのは無理と判断し、方法を考えていたが

急に、立ち上がり

「じゃ、行きますか」

といつて、屋敷の方へ向かつた。

その頃、屋敷にいたナギたちはとつとつ・・・

「ねえ、本当に大丈夫なの?」

ヒナギクは聞きました。すると、SP達が、「心配いりませんよ。警備は万全ですか?」

そう自信を持つて言いました。

なぜなら、今回に備えSPの数を4倍にしているし警備口ボを強化していたからである。

しかし、ヒナギクは・・・

「なんか嫌な予感するんだけど・・・」

と心配していた。しかし、その予感は的中していた。

「ふん、甘いんだよ。お前らじや俺は倒せんぜ・・・引っ込んでなハヤテはあつとつう間に屋敷の警備口ボを避けていた。

「さて、行くか。どこにいくかな・・・たぶん固まつてゐるだろ?から1人になつたとき狙うか」と言つと、ハヤテは屋敷へと入つていた。

そんなことを知らない、ナギ達は部屋で過ごしていました。

マリアが

「皆さん、お腹減つてゐるでしょ?し、なにか作つてきますね

と言つと、ヒナギクが

「1人じゃ危ないので私も行きますよマリアさん」

マリアとヒナギクは、厨房へと向かつた。

しかし、2人は気づかなかつた、ハヤテが見ていることを

厨房に着くと、2人は料理を始めました。

「マリアさんと話すのも久しぶりですね」

「ええ、最近忙しかつたから話す機会はなかつたですよね」

そんなたわいもない話をしていると

「あら？砂糖がないですね」

とヒナギクが言つた。

「あ、近くの倉庫にあるんで取つてきますよ」と言つと10mほど離れた倉庫へ取りに行つたが

ハヤテがこのチャンスを逃すわけがなかつた。

「さやああああああ！」

あつという間に斬るとハヤテはすぐ去つて行つた。マリアの声にヒナギクが走つてきた。

「大丈夫ですか？マリアさん」

その後から、ナギ達がやつてきた。

「マリア、大丈夫か？返事をしてくれ」

しかしマリアは何も返事しない。どうやら氣絶していようつだ。

傷は肩からお腹の部分まであり、早くしないと出血多量で死んでしまう。

すぐにはマリアは医務室へと運ばれた。医師はこう言つた。

「先ほどの方より傷が深いです、もしかしたら助からないかもしません」

その言葉に、皆は凍りついたが、マリアは幸い大きな怪我もなく助かるとの報告が入ると、全員ほっとしたような顔をした。

7話（後書き）

とつあえず、自分で書いたのもなんなのですが
話がよくわからんです。
内容が分からなかつたらすみません
では次回、お楽しみに

「マリアが助かつて30分後、竣達は部屋で相談していた。

「やはり、常に3人行動した方がいいな」

「だな、マリアも1人になつたとこを狙われてるし」

「でもこのまままつてもなあ」

「いつそのこと賭けてみる？」

「真剣に話あつていたため気づかなかつたが

実は会話を聞かれていたのだ。

「ふうん、3人で行動されたらきついな」

ハヤテはそういうて聞いていた。

話し合いはしばらく続いたが

結局、3人で行動することとなり様子を見ることとなつた。

メンバーは（竣、ナギ、ヒナギク）（伊澄、ワタル、咲夜）です
ちなみに咲夜は軽い怪我だつたので治つたということでお考えください。

「じゃ、トイレ行つてきますね」

と伊澄が言った。

咲夜と伊澄がトイレへと入つてワタルだけが残つた。
しかし、これが最悪の事態を招くこととなる。

ワタルは疲れていたのでボーッとしていた
しかし、これが命取りとなつた

いきなりしてきたハヤテに気づくのが遅れ、斬られてしまつた。

その場にワタルは倒れるのを見届けるとハヤテは

足早に去つていつた。

その数分後、伊澄と咲夜が出てくると驚いた、2人は思いつきり叫んだ。

その声に驚いて竣達があわててやつてきた。

「どうした？ 何かあつたか？」

その言葉を聞くと竣はワタルの脈を計つた。

「……これは」

「どうしたの？」

それは一瞬だつた、ワタ

斬られて倒れた瞬間にもう死んでいたのだ。

ついに死人が出でしまつた。もうこれ以上ハヤテを逃かしとぐわけには

いかなかつた。すでに2人を怪我させ、1人を殺しているのだから・

（三）「後藤は力が足らぬ」（後藤は力が足らぬ）

しかし、動搖していたのは、竣達だけではなかつた。その人物はもちらんハヤテだつた。

なせなら、確かに襲ふとは言つたか殺す、もやはまつたくなかつたらだ

「クソッ、まさか死んじまうとは思わなかつたぜ。殺したからには俺は生かしく訳はねえだろくな……どうするよこれ」

ハヤテはしばらく考えていたが、すつと立ち上がり、

「仕方ねえ、捕まつてもいい、やれるとこまでやるか」「ハズレはその場へいきなさい。

そう言つと、ハヤテはその場から離れた。

一方、ナギらは話し合っていた。

「たぶん、今までの話は聞かれているだらう
周りに注意してハヤテを探せ！！」

皆は頷き、手分けして探した。

ハヤテも次の相手を探していた。すると、目の前にヒナギクが一人で立っていた。

「ふん、隙がありすぎだな・・・死ね！！」

そう言つて、ハヤテは近づいた。しかし

「かかつたわね」

とヒナギクが言つた瞬間にハヤテは罠にかかってしまった。

「うわ、なんだこれ？」

ハヤテは大包平で斬ろうとしたがまったく斬れない。

「ふふ、そのロープはどんな刀でも斬れないようにしてある
あばれても無駄だよ」

と言つたあと他の人は出てきた。

「ヒナギク、ありがとう」

「これぐらい、いいのよ」

と会話をしていると

「竣兄さん、ハヤテはどうする？」

とナギが言つた。

「ふふ、見事に捕まつてるね・・・さて
お前はどうするかな？警察にだすか？」

そういうつてみんなの意見を聞いていると、
急に、ハヤテがもがき始めた。

「ぐわああああ、頭があああああ
と叫んで頭を抱えていた。

「なんだ、大丈夫か！？」

しかし、ハヤテはさらにもがいていた。

「誰か助けてくれ・・貴様なぜ出てこれた・・・
と言つとハヤテはばつたり倒れた。

どうやら氣絶したらしく。

峻達はしばらく啞然としていたが我にかえると

「ふう、どうする?」

「まあ、とりあえずこのままにしてくのもダメだからな・・・

おい、こいつを罷から外し部屋に連れてけ」

と言つと、S.P.達がやってきてハヤテを罷から外し部屋へと運んでいった。ヒナギクは

「ねえ、また起きて逃げたらどうするの?」

「いやそれはないだらう、さつきいただらう?」

ハヤテには別の人格が入っているつてたぶん、いまのは封じられていたハヤテが

出てきたんだらう?」

「なるほどね、だからさつき(貴様なぜ出てきた)つて言つたのね」

「そうだ、今はハヤテが目を覚ますのを待つ」と言つと、峻達はハヤテが寝かされている部屋へと向かつた。

皆さんありがとうございました？

一応、区切りでここまでにしました
さて次回は一区切りにするつもりです

9話（前書き）

今回、ハヤテが死ぬという形で
1区切りつけたいとおもいます

ハヤテが寝かされている部屋に着いた竣達はハヤテが目を覚ますのを待つた。

その頃、ハヤテは「ううん、ここはどこだろ？ なんでこんなところにいるんだ？」と、声が聞こえた。

「おい！ 俺をこんなとこに封印しやがって出しやがれ！」

「あなたは誰ですか？ なぜここにいるんですか！ ？」

その言葉に声の人は黙つた。

なぜなら、この人はハヤテをあやつり人殺しをやった張本人だからである。

「いや、気がついたらここにいたんですよ。（マズイ、ここで乗つ取つて人殺しなんかしたつてバレるわけにはいかない）」「え、そうですか？ 大変ですね」

ハヤテは相手を気遣つた。

「ああ、そうなんだ。助けてくれないか！ ？」

「ええ、いいですよ、ちょっと待つてくださいね」と言うとハヤテは近づいていった。

「（ククク、また乗つ取つてやるぜ・・それにしても単純な奴で助かつたな）」

ハヤテはまた乗つ取られてしまつのか？ とその時

「ハヤテ、その人を出しちゃダメだぞ」

その言葉にハヤテは振り向く。

そこには見覚えのある人物が立つていた。

「茜兄さん……」

それはハヤテの兄であつた。相手は暗いところいたのでよく見えなかつたが

確かに兄であることは分かつた。

「茜兄さんなぜここに？」

ハヤテは聞いた。すると茜は

「ここはお前の心の中だ。そしてそいつはお前を乗っ取つていたやつだ」

「本当なの？ 兄さん」

「ああ、本当にやつたんですか？」
すでに、咲夜、マリアと言つ者に怪我を負わせ、ワタルと言つ者を殺したのだ」

その言葉にハヤテは愕然とした。ハヤテは相手をこらみつけると「あなたは本当にやつたんですか？」

「いや、やつてない、やつてないよ」

ハヤテの後ろに黒い影が出てきた

「その鎮、貴方を封印しておるだけじゃないんですね
その鎮で貴方の脈を計れます。貴方は嘘をついていますね」
相手は目が死んでいた。

「ふう、せめてやつたことを素直に言つてくれれば
少しは許してあげたのに……やつたにも関わらず
嘘をついて逃げようとするなんて貴方は許しませんよ絶対に」

「す・・すまん、謝るから助けてくれ
「そこで反省しているといいですよ」

「」とハヤテは振り返つて

「兄さん、ありがとう危うくまた人殺しをやるところでしたよ
「いいんだ、それよりはやく戻れ、今度は現実世界で会おう
「うん、また後でね」

しばらくすると周りが明るくなつてきた。

周りには人がいるらしく、声が聞こえた。

「ハヤテ、目が覚めたか……よかつた」

「竣様・・お嬢様・・咲夜さん、伊澄さん、ヒナギクさん」

「良かつたわねナギ」

「いや、それはその・・別にハヤテのことなんか心配してないぞ」

「ナギ、あんなに心配してたじやない」

「そつや、そんなに恥ずかしがらんでええやん」

「ナギは顔が真つ赤だつた。

ハヤテは思った。

「（あ）、こいつの聞くの久しぶりだな・・・

でももう僕は執事じやないんだよな・・・

もうこんな会話を聞くことはないだろうな・・・」

このハヤテの考えていたことはあとで分かります

「ハヤテ？ なにを考えてるんだ？」

とナギが顔を近づけて言った。

ハヤテは我に返るといきなり顔を赤らめた。

ナギは不思議に思った。それを見かねて竣が

「お前、なにがなんでもそれは顔が近づきすぎじやないのか？」

ナギはすぐ顔を離したが真つ赤になつてこる。

ハヤテも真つ赤になり下を向きつつもちらりちらりとナギを見ていた。しばらく静寂が続いたがハヤテが

「ちょっと、考えごとをしたいので部屋から出てくれませんか？」

竣達は部屋から出て行つた。ハヤテはふうとため息をつき

「僕はこれからどうするかな・・・このままいるか

出て行くかだよな・・・」

しばらく悩んでいたが何か決心したように机に向かい、一心不乱に何かを書いていました。

その頃、竣達は部屋に戻っていました

マリアも怪我が治ったところ」とお考えください

「さて、そろそろ夕食ですし、何か食べたいわね」

「そういえば」飯をつくるといつていたがマリアが斬られたから結局食べれなかつたな」

「じゃ、私がハヤテ君を呼んできますね」

マリアがハヤテのいる部屋の前に行き

「ハヤテくん、夕食を食べるのでは、出てきてください」

しかし、返事はないマリアは

「寝てるんですか～、入りますよ」

マリアは部屋に入ったがハヤテの姿は見えなかつた。

マリアは部屋を出て「行こうとしたが机の上に1枚の紙があるのを見つけた。

その手紙はハヤテが屋敷を出て行くことを書いた手紙だつた
「早くナギ達に伝えなくちや」

その10分後ナギ達はハヤテを探しに出かけた。

そのハヤテはと言つと、とある崖のところに来ていた。

「これでいいんだ僕は一度助かった命もうなんの未練も後悔もないんだ」

その時、ナギ達がハヤテを見つけ、こつちに走つてきた

「ハヤテ～」

「やつぱり見つかりましたか・・さすがですね

ハヤテはそういうと手紙を出し地面に置いた。

「ハヤテお前なにをするきなんだ？」

「ハヤテ君はやまらないでまだいきていけばいいじゃない

「でもどうせ、いつ僕が乗つ取られて人殺しをするかわからないですし」

ハヤテの言つ「」とはあたつっていた、今は封印されているがいつ解け

るか分からぬのだから

「でもお前が責任を負うことはないだろ？」

「でもこの靈は伊澄さんも除靈できないだろ？」「うるしか
方法がないんですよ……」

ハヤテはそういうとつむいた。皆だまつていたがハヤテが
「では、これでお別れです……最後に一つ言わせてください」

「お嬢様、僕は好きでした。屋敷を追い出されたときから

お嬢様のことが気になつてました。最後に告白できて良かつたです……」

「お嬢様、僕は好きでした。屋敷を追い出されたときから
お嬢様のことが気になつてました。最後に告白できて良かつたです……」

ハヤテは崖から飛び降りた。ナギは、

「ハヤテえ！」

思いつきり叫んだ。ナギは泣き崩れていたが崖の方へ行き

ハヤテが残した手紙を見た。それは1人1人に書いた手紙であつた。
「皆さんへ

マリアさんへ

今まで迷惑かけてすみませんでした
これからいい人が見つかるといいですね

ヒナギクさんへ

いつも助けていただきありがとうございました
これからも皆の手本となつて頑張つてください

咲夜さんへ

咲夜さんはいつも困つてゐるとき助けてくれたり
する人なのでこれからもお嬢様をお願いします

伊澄さんへ

伊澄さんはお嬢様の親友ですのでお嬢様のことを
一番分かっていると思うのでお嬢様をお願いします

竣様へ

竣様はいつも僕を気にしてくれていたし
これからも皆さんを優しく接する心で頑張ってください

お嬢様へ

僕はお嬢様のことが好きでしたでも僕はもう
お嬢様を守ることはできないですが
いい相手を見つかるよう見守っていきたいとおもいます

皆さんもよろしく

幸せが皆さんにあることを願っています

綾崎 ハヤテよひ

9話（後書き）

ハヤテが死ぬシーンが微妙だと思いました
今回で1区切りつけて次回から
新しい話へ向かっていきます
ぜひ、お楽しみに
あ、それと感想書いてくれたらうれしいので
ぜひ書いてください

ハヤテが死んで5年後、その後のそれぞれの人生を見てていきたいと思います。

まずは、咲夜・・・・

咲夜は高校を卒業すると、単身アメリカへと留学し、今は向こうの大学で一生懸命勉強しています。

また、向こうで同じ日本人の森 和哉と結婚しました。また、大学では日本での高校同様、男女とわざ人気で勉強もクラスでダントツトップと勉学も順調に進んでいるようです。

今回はオリキャラがたくさんだったので次回からオリキャラを1人ずつ紹介していきたいと思います

続いて、伊澄・・・・

伊澄はといふと世界の困っている人を助ける団体を結成し、世界を回り、多くの困っている人達を助けている。また、今では迷子になることもなくなつてあり、一人で行動できるようになつてている。ちなみに現在はブラジルで活動中である。

次は、マリア・・・・
マリアは5年も経つていてのにもかかわらず
まったく昔のままである

なぜ、彼氏ができないかという疑問は置いといて
マリアもナギが大きくなつたこともあり
自由な時間も増えたことをきっかけに
今までしなかつたことをするようになりました
まあ、いっぱいありますぐるんでこれは後ほど
書く場所があつたら書かせていただきます。

続いて、ヒナギクと峻・・・・

なぜ2人いっぺんに言つたかというと
ヒナギクと峻が結婚しているからである。
まだ、子供はいませんが峻いわく
子供は1人は欲しいそうです

ちなみに、ヒナギクは白皇学院の教師
峻は白皇学院の理事長をやつています。

最後に、ナギ・・・・

ナギはあいもかわらず引きこもり生活をしていた・・・・
とまあ「冗談は置いといてここ5年で見違えた
帝から三千院家グループの権利を譲り請け
資産を拡大させるなど大きな利益をもたらしたり
スポーツも自らやるようになつたり

苦手だった家事をマジめにとりこんでいる
特に料理の腕前はマリアに劣らないほどまで上がり
ちよくちよく行つ社交界やパーティーで来た客を感動させ
るまで

成長しているのだから驚きだ
しかし、人見知りはあいもかわらずで執事にいたつては
ハヤテのことがあるのかこの5年誰もついていないのだ

また跡継ぎを残さなければならないのに全然
結婚相手が決まらないという問題があり
まだまだ安心できない日々が続いている

といこまで皆の人生を見てきたがこれから物語をすすめていきたい
と思います

今日は、ハヤテの命日（10月20日）。

ちなみにハヤテが死んだのは2008年で今は2013年という
方向でお考えください。また、ハヤテの墓はナギ達兄弟の両親の墓
の隣
にあります。

ある日の白皇学院、ヒナギクは今日新しく来る転校生を待っていた。

「そういえば今日つてハヤテ君の命日だな・・・」

皆、あまり考えなくなつたといってまだ5年

ハヤテのことをふと思い出すことがある。

確かに、悲しい過去だが泣くことはない。

なぜなら、もう過ぎたことは仕方ないと思つてゐし

ワタルやハヤテも残つた人が泣くことを望んでいないと皆分かつて
いるからだ

ふと思いつつも

「それにしても、転校生遅いんじやないかしら」

そう思つてすこし苛立つていると峻が入つてきて

「ヒナギク、転校生は急な用事があつて放課後の部活決めにしかこ
ないことになつた」

と言つた。放課後に必ず入る部活を決めないとけないところのは

この小説の白皇だけの特別に造つたものである

「あ、あと前の学校で剣道やつてたらしいから頼むよ」

「ええ、分かつたわ」

と言つとヒナギクは教室へと向かつた。

そして、時は流れあつという間に放課後、

ヒナギクははやく転校生が来て部活を決めることを願つていた
なぜかというと今日はハヤテの命日早く帰つて三千院家へ行かなければならなかつたからだ

ちなみにヒナギクは剣道部顧問をやつています

と思っていると、

「すいません！遅れてしましました」

と転校生が現れた。普通なら怒つているだろうがヒナギクは我が目を疑つた。

なんと、そこにはハヤテがいたからだ

ハヤテが死んだ後周辺を探したがハヤテの死体は出てきませんでした

「ハヤテ君！？」

ヒナギクは思わず叫んだ。しかし、ハヤテそつくりの人は

「え？僕は堺正登つて言いますし、あなたとは面識はありませんよ？
ていうかハヤテって誰ですか？」

正登は聞いた。ヒナギクは

「な・・なんでもないわ（そうよね、ハヤテ君は死んだんだし
相手も違うつて言つてるし別人よね・・・・・」

ヒナギクはそういうと

「正登君だったかしら？私は桂ヒナギクよ。ここに顧問をやつしているわ

あなたは剣道部に入りに来たのかしら？」

と語りと正登は

「はいそりです桂さんですねようしくお願ひします」

正登はこつこつ笑いながら言った。

「じゃあ、皆に自己紹介しましょ」

と言つとヒナギクは部員を集めた

「彼が今回入る転校生の堺正登君よ」

「どうも堺正登です前の学校では同じく剣道部でしたがなぜかいろんな部活の人に頼まれて他の部活もやっていました。でも剣道が一番好きです。あと趣味は料理、掃除、裁縫、などいろいろなものが好きですね

勉強はあまり得意ではないんですがなぜかずっと学年で一番でしたねまあ自己紹介はこれぐらいでいいですか？」

ヒナギクは思つた

「（外見も同じなら、中身も同じなのこの人本当にハヤテ君じゃないのかしら？）

じゃあ、早速正登君も入れて試合をやつてみましょ」

ヒナギクはそういうて試合を始めた。

しかし、始めて30分もしないうちに試合は中止となつた。なぜか？それは正登が部員全員（軽く50人はいます）をあつとこう間に

倒してしまいました対戦する人が残つていないと理由だった。

ヒナギクは帰らうとしていた正登を呼びとめ

「ねえ、正登君今日用事ある？」

と聞いた。正登は

「今日は用事は特にないんですけど・・・それがなにか？」

「いや、ちょっと来て欲しいところがあつたんだけいいかしら」

「ええ、いいですよ」

正登はしばらく悩んでいたが答えた。ヒナギクは正登の答えを聞くと三千院家へと連れて行つた。

「おお～、大きい屋敷ですね。」

「じゃあ、行きましょ」

ヒナギクは扉を開け、屋敷の中へと入つていった

その頃、ナギ達は

「遅いなヒナギクの奴・・・」

ナギはそういつた。そこには

いつものメンバーが揃つていた。皆は笑つていた。

なにしろ皆それぞれ忙しいのでハヤテの命日などでしか顔を会わす機会がないからだからこそナギからあの言葉が出たのだ。とそこへヒナギクが現れた。

「遅い！何をしていた？」

ナギは怒り混じりに言った。

「まあまあ、ナギ落ち着いて」

マリアがヒナギクをカバーした

「ごめんね、ナギ・・・それより皆にあって欲しい人がいるんだけど」「誰だ？」

ナギが聞くと、ヒナギクは

「いいわよ正登君。入つて」

正登はその言葉を聞いて、入つてきた。峻達は驚いた

それはそうだろうハヤテそつくりなのだから

「ハヤテ！？」

皆同時に叫んだ。しかし、正登はきよとんとしていたが

「誰ですか？ハヤテって僕は堺正登つていうんですけど

ていうか貴方達を見たこともないんですけど・・・」

と言つた。峻は

「ああ、すまん人違いだな」

「あの・・・桂さんもいつていたんですがハヤテって誰ですか？」

と聞いてきた正登に峻は全てを話した。

正登は話を聞いたあと、うつむきながら

「やうだつたんですか・・・そんな話をさせたり思つて出されせたりしてすみません」

「いや、別にいいんだよもう5年もたつてゐし今田はそのハヤテの命日だから

君に話さなくとも思つてゐしわ。

「はあ、やうですか」

「ほりほりそんな顔されるほつがいつかまつりいんだよ。元気をだして」

「ありがとう」

正登は笑顔で返事した。峻は

「（謙虚だし、優しい奴だな・・・ホントにハヤテじやないのか？）

こいつ」

と思った。そこへマリアが入つてきた

「明日は白皇は休みですが正登君は用事ありますか？」

「え？ 特にないんですけど・・・」

「じゃ、明日行きませんか？ ハヤテ君の墓に」

「いいんですか？ 僕部外者ですけど・・・」

「ウチは、ええと思うで」

「じゃ、お願ひします」

「うむ、どうせなら今日は泊まつていいくのだもつ夜遅いしな

「いや、そこまでしてもううのは・・・ちよつと」

「いいんじやない？ 少し欲張らなこと幸せ逃げけりつわよ正登君」

その言葉についに正登も折れた。

「そこまでいつててくれるなら泊まります。じゃあ、親に電話をせてください」

と言つと親に電話をし、正登は二千院家に泊まることとなつた。

正登は名前を知らないため1人1人の名前を確認した。

「えーと、右から順に桂さん、鶯ノ面さん、愛沢さん、三千院さん、峻さん・・・あれ？」

正登は不思議に思った。正登は指を指し、

「なぜ、この人だけ苗字がないんですか？」

そういつた瞬間、部屋は凍りついた。正登はこれは聞いてはいけない話だつたと感じ

「マリアさんとよばいですね」

と言つた。その言葉に凍りついていた部屋の空気が元に戻つたた

正登は安堵の表情をみせた。

ちよづじヒナギク達も泊まるとあつて三千院家はとてもせきやかだつた。

特に、正登は皆から引っ張りだこで疲れたのでトイレに行くことにした。

正登がトイレに行くために部屋を出で、トイレに行こうとしたが迷つてしまつた。

そうやつてトイレを探してみると前方にトラがいるのが見えた。しかも田が合つてしまつたため、いきなりこつちに走つてきた

「うわ、やばこつち来た」

正登は急いで逃げたが、どんどんと近づいてくるトラに正登はもうダメだと思った瞬間にトラは吹き飛んだ。

なにが起きたんだと思った正登は後ろを向くと、そこには峻がいた。

「まったくなにやつてんだお前は・・・正登大丈夫か？
てこゝかなにしてた」

正登はトイレに行こうとして迷つたことを正直に話した

「アハハハハ、なんだ迷つたのか」

その言葉に正登は顔を赤くしていて言つた。

「仕方ないじゃないですか・・よく分からなかつたんですかい」「じゃ、なぜ言わなかつたんだ?」

峻が尋ねると

「えつと・・それは・・」
「はは、どうせ聞かなくてもいいと思つたんだろ?」
正登は「ククリとつなづいた
「きにするな、ここは広いから迷こやすいんだ。
ここに来た客も迷うことがあるなにもお前だけが迷つてゐわけじゃないんだからな」

正登は

「（この人、なんて優しいんだろう、それにすこくかっこいいし、トヲを一撃で
倒すなんて強すきるし、なんか尊敬しちゃうな）」
と思つていた。正登がそんなことを考えていると峻が
「なあ、ぶっちゃつけ、お前堺家で生まれないんじゃないか?」
と聞いてきた。

「ええ、そうです。僕はもともと堺家にいたわけじゃありません」
峻はそれを聞くとやつぱりといつよつな表情をした。正登は聞いた。
「でもなんで分かつたんですか?」

「いやな、お前が電話してゐる時にお前の話し方が親と話すものには
見えなかつたんだよな」

そういうつた後トイレに着き、トイレをしたあと出でてきたときにも考へ
ていた

「（あれだけで分かるなんてす）いな・・・・」
と思つた。峻が部屋に戻る途中、聞いた
「で、お前どうして堺家にいるんだ?」
正登は峻に話した。その内容は、自分は生まれた田も自分がなんて
いつ名前かも分からないこと、浜辺に打ち上げられていたのを見つ
けて拾つてくれたことなどだった。

峻は、

「なんか、嫌な思い出を思に出せたなすまん」

「いや、逆に言つてなんかすつきりしましたよ。ありがと「ひざこ
ました」

と言つてこぬひづひに部屋に着いた。そのあとは何事もなく時間が過
ぎ、

寝る時間となつた。明日はなにが起るのか楽しみな顔をして正登
も眠りについた

1-0話（後書き）

話がまとまつていないのでこの話は
よくわからぬかもしぬませんがすみません
さてここから第2章目に入つてきます
気長にお待ちください

1-1話（前書き）

今回からオリキャラを紹介していくつもりでいます。

三千院竣

三千院家長男。次期当主と言われたがナギに譲り、白皇学院の理事長をやっている。また、優しくも厳しいので、周りの人から多くの信頼を持っている。

次の日の朝、正登は三千院家で田を覚ました。

「あ～、よく寝た。ていうかやつぱでかいなあ」

正登にすればこんなとこもう一生来れないところであるが。

しかし、起きてすぐ正登は何かに気づいた。

「どうしよう・・・着替えないじゃん」

そり、屋敷に泊まつたはいいが屋敷に着いてから泊まることになつたため

着替えなどあるはずがないのだ。とりあえず正登は

部屋を出ることにした。どこへ行くか迷つてると声がした。

その部屋のドアを叩き、どうぞと言つ声が聞こえたので、

部屋に入つた。そこにはほぼ全員（ナギ、伊澄以外）揃つていた。

「お、正登おはよう」

「おはようございます」

そうあこせつした正登は聞いた。

「あれ？三千院さんと鷺ノ宮さんは？」

「ああ、あの2人はまだ寝てますよ」

とマコアが言った。今時間は9時である。正登は

「（まだ、寝てるのか、ていうか寝すぎじゃないですか？）」

と心の中で叫んだ。ちなみに正登が起きたのは8時だが
着替えがないやらで困つていたためこの時間帯になつてしまつただ
けです。

すると、峻は聞いた

「なんで、お前こんな時間帯に来たんだ？」

「いや、僕着替えないから困つてたんですけど・・・
すると、峻が

「あーそつかお前着替え持つてきてないもんな（笑）」

そう言いながら笑っていた。その言葉に周りの人達も笑っていたが

「笑い事じゃないですよ、ひどいですよ笑わないでください！！」

「あはは、いやー『ごめん』ごめん・・・着替えなら俺の使えよ」

「え？ いいんですかそんなこと」

「遠慮するな正登ちょっとと来い」

と言つと峻は正登を自分の部屋へと連れて行つた。

「さあ、どれでもいい選びなさい」

「え？ そんなこと言われてもこれは・・・」

正登が迷うのも無理はなかつた。

そこには何千着もの服があつたからだ。なにを選んでいいか分から
ない正登は

とりあえず峻に質問してみることにした。

「峻さんってこの服全部着たことあるんですか？」

「ん~、ないな基本的に俺は向こうの服を着るからな

正登は峻が指差したところをみた瞬間に啞然とした。

そこにはこれまた何百着という服があつたからだ。

「じゃあ、向こうのは全部着てるんですね」

「ん~よくわからんがきてないのもあるんじゃないのか」

「あはは・・・そ・・・そなんですか～（ホントに
この人達日本人なのか？）」

そう思つていたがいつまでも悩んでいるのも時間の無駄なので
峻にお願いをしてみることにした。

「あの・・・服が多くて迷うんで、僕でも似合いそうな
服選んでくれませんか？」

「ん？ いいぞ・・・でも俺に選ばせていいのか？

「後悔してもしらんぞ？」

「いいですよ。これは峻さんの服なんですから
しかし、峻は思った。

「（いくらこの服が俺のでもきちんと選んでやんないとな・・・）

そんなことを考えながら、服を選んでいると、着の服が目に入った。それは以前これと同じような出来事があったときハヤテに貸した服であった。峻は「これがいいなと思ったかどうかはわからないうが

「これなんかどうだ？俺的にはいいと思うんだがな」「確かにカッコイイですねこれ、じゃこれにします」

「そうか、じゃ俺は部屋の外で待ってるから着替えたら呼んでくれ」そういうと峻は部屋の外に出た。峻はふうと息をはき

「（そういえば、ハヤテのときと同じこと言つてたな、なんでだろう？）

正登もハヤテと同じ考え方だったな正登はハヤテじゃないのか？」峻には思い当たることがたくさんあった。

まず、外見が同じなこと、しかしこれは対して問題ではない次に言語、特に困っているやからかわれているときの口調はハヤテそっくりだ。趣味もハヤテとまったくもって同じだった。そんなことを考えていると正登の声がした。どうやら着替えが済んだらしい。

峻が部屋に入ると正登が

「これどうですか？僕はとてもいいと思うんですけど

「ああ、とっても似合ってるじゃないか！」

「ありがとうございます。では行きますか」

「そうだな」

そんな会話をしながら峻と正登は部屋に戻った。時刻は10時を過ぎていた。

部屋に入るなり、峻は急に機嫌が悪くなつた。

「まったく・・あいつあんなに夜更かしするからちなんに、伊澄はもう起きてきています。

隣でマリアが

「まあまあ、落ち着いて峻。それにしてもその服久しぶりに見ますね」

「へ？この服がどうしかしたんですか？」

「その服は5年前にハヤテが着てたもんや

「あ、そうなんですか～」

「しかし、その服似合つてますね正登様

「本当ね、似合つてるわよ正登君」

「ありがとうござります」

「確かに似合つてるな」

その声に、後ろを向くとナギがいた。

「あ、三千院さんおはよ～ござります」

「なんだやつと起きたのか？」

「ナギ遅いわよ」

「もつと早く起きないとダメよナギ」

「伊澄さんも人のこと言えんやろ」

「ナギ、人待たせちゃダメですよ」

「咲夜さん！？」

「なんや、和哉さんやん。なんで来たんや」

「なんでじやないよ。勝手に置いて行つておいてそれはひどいんじ
やない

一緒に連れて行つてくれるつて言つたのこな

「ああ、すまん、すっかり忘れてたわ

「まあいいですよ」

それぞれ話していると正登が

「あの、そろそろ行きませんか？」

「あの、咲夜さん？そちらの方は？」

「あ、こいつは・・・」

「堺正登です宜しくお願ひしますあなたは？」

「俺は森和哉だ宜しく」

そして、峻達はハヤテの墓がある伊豆へと向かつた。

しかし、正登は行くときにも驚きしつぱなしだった。

和哉は最初、咲夜と一緒にいたがもう慣れてしまつた

らしこ。

まず、敷地内に飛行場や湖、遊園地などあることなど普通はないし、普通に200人は乗れるかといつ飛行機を持つていろことひがひこ元々としていた。

「いや～、すごいですねえ」

「え？ これよりもっと大きいのあるぞ」

「は？ いやいやこれ以上大きいつて言つたらジャンボジェットですよ」

そうこつた瞬間にジャンボジェットが5台あるのが見えた。正登は唖然としていたが

「あははー、それより早く行きましょつか」

「ああ、そうだな」

それから、約1時間後峻達は伊豆に着いていた。

「さて、行くか

そういうて峻についていくとそこにはびつみても同じ屋敷があつた。

「あの・・・これ、かわってないんじゃ？」

「いやー違うぞ、ほら太平洋の絶景が広がっているんだ

「本當ですね」、ていうかそれだけなんじゃ・・・」

「う・・まあそなうなんだけど」

「じゃ、墓参りとでもいへか」

峻達はハヤテの墓がある場所へと向かつた。

まあ、屋敷の裏にあるからすぐ着くのだが・・・

ハヤテのお墓参りも終わり峻が

「じゃ、夕食まで自由時間とする」

「え？ 帰らないんですか？」

「ああ、これが本当の目的なんだ

「へへ、やうなんですかでも僕は・・・

「いいだろ、明日まで休みなんだから、俺からお前の親に電話しといてやるか」

「そこまでいいうなら、遠慮なく楽しませていただきます」

「それでいいんだ。あ、それとお前は俺と行動してもいい? 「なぜですか?」

「お前はハヤテに似ている・・ハヤテはよく女装させられてたんだお前もやられるかもしれないからさ」

「なるほど~分かりました。では、一緒に遊びます」

「念のため、正登を女装させようとしたらお前らただじゃおかないからな」

一応、峻はナギ達にも忠告した。

ちなみに、(峻・正登)、(ヒナギク・マリア)、(ナギ・伊澄)、

(咲夜・和哉)

で行動します。

それぞれのメンバーと一緒に別々の温泉へと向かつた。ではそれぞれの過ごし方を見ていこう。

まず、ナギ、伊澄ペアは伊澄が持つていてる温泉に来ていた。温泉に入りながら、ナギが漫画の話をしていた。

よべのぼせないと聞こえる声はスルーしていく。

さて次の咲夜と和哉ペアは咲夜が持つていてる温泉へと来ていた。

「いや、まさか咲夜さんが温泉持つていてるなんて思いませんでしたよ。

さて、次はどこへいきますか?」

「せやな、いろんな温泉回つてみようないか

そんな話をしながら、温泉巡りを楽しんでいた。

次に、ヒナギクとマリアペアはとりあえず温泉を巡っていた。

温泉の中ではヒナギクとマリアが話していた。
まあ、主にヒナギクの相談や悩み事をマリアが一刀両断できつて
いく
だけなのだが・・・。

最後に峻と正登ペアははとじと伊豆の奥にある
温泉へと来ていた。

「いや～、なんか秘湯っぽいとこですねえ」
「ああ、そうだな。しかし途中のあの人なんだつたんだ?」
「ええ、確かにあの人行くのに4000円つてぼったくりですよね」
「まあ、あれぐらい気にならないけどな」
「それにしても峻さんつて白皇学院の理事長さんなんですね。
ビックリしましたよ。」
「え?あ、そういえば言つてなかつたなすまん」と楽しく世間話をしていました。

そしてあつという間に夕食の時間
峻は正登の両親に電話するために席を外していましたが、
客がきたので客の対応をしていました。

「いや～、峻さん遅いですね」
「まあ、それはいいとして正登・・・
と言つとナギは笑っていました。正登は嫌な予感がしました。しかし、嫌な予感
は現実となりました。ナギの次の言葉によつて
「お前、この服着てみてくれないか?」
とナギは女の子の服を持っていました。そのナギの言葉に

「おお、ええな」

「見てみたいわね」

「私も見てみたいです」

「あ、俺も見てみたいな」

「正登君にはフリフリのドレスが似合つと思こますよ（笑）」

「つむ、全員一致だな」

「そんなあ無理ですよ（と油断させて・・・）今だーー」
正登は隙をついて逃げ出しました。後ろからナギ達が追つてきますがなかなか追いつけません。

「待てー」

「待てつていわれて待つって人なんかいませんよー」
「正登君、あきらめてこの服を着てくださいーーー」

「人間、あきらめたら終わりですよー」

しかし、廊下はいきどまりになつた。正登ビリになる？

女装させられてしまうのか？

ナギ達が正登に近づいていつた瞬間に後ろから声がした。
「お前らなにやってんだ？」

そこには峻が立つていた。峻は正登の方へと近づき、
「なるほど、正登を女装させよつとしてたんだな？」
「いやしてないよなにも」

その言葉はどこか震えていた

「本当か？正登」

「峻さんの話がだいたいあつてます。ていうか全部あつてます、
その話を聞くと峻は後ろを向いた。あきらかに

峻の後ろから黒いオーラが出ていた。

ナギ達はびくびくしていた

「あれほど、女装させるなと誓つておいたのに・・・
早く食堂に戻つてろーー」

「はーーーー」

ナギ達は急いで食堂へと走つていった。

「まったく、あいつらはもう・・・」

「まあいいですから、戻りましょう。峻さん」

「やうだな」

と言つと峻と正登は食堂へと向かつた。食堂へと行くと

その後は何事もなく時間が過ぎていった。

食事が終わると、皆おもいおもい好きなことをやつていた。

漫画をよんだり、ゲームをしたりしていたが時刻は11時を過ぎていた。

「さて、みんなもう寝よう。今日の朝みたいになつたら困るからな」と言つと峻はナギと伊澄の方を見た。

「な・・なんだよなんでこつちみるんだよ兄さん」

「まあ、別にいいけどな・・・」

とナギ達は楽しく話していました。

さて、場面はかわつて屋敷の外、3人組の男達がいました。

「くく、ここが三千院家の別荘か・・・」

「結構広いですね」

「それだけやりがいがあるつてもんよ」

「さていくぞ」

「はいボス」

この3人組はなにをするつもりなのか？それは後ほど分かります。

さてここはナギと伊澄の部屋。

部屋は（ナギ・伊澄）、（咲夜・和哉）、（ヒナギク・峻）が2人で

正登とマリアは1人ずつです。またマリアは2人で寝てもかまわないと言つたが、

正登が女の人の寝るのはよく寝れないからいいですと断つたため別々に寝ています。

話がぎりぎりで止まってしまったので戻そう。

ナギと伊澄はあれだけ峻に早く寝ると言われたのに夜更かしをしていた。

しかし、温泉に長く浸かっていたからかいつもよりはやく寝た。深夜2時ごろナギはトイレをするために起き、トイレへと向かつた。しかし、トイレから帰つてくるときに事件が起つた。

トイレから戻つてきついた途中、何者かに口を布のようなもので押さえられた。

ナギは必死にもがいたが相手が男であることに加え、布の中にクロロホルムが入つていたらしく急にナギはガクンと力が抜けた。

男は

「ククク、意外と簡単だつたな」

と言つとナギを抱え、屋敷から去つていつた。

1-1話（後書き）

皆さんどうでした？なんか正登と峻がでてくるのが大部分をしめているのですが気にしないでください。

1-2話（前書き）

堺正登・・・・

砂浜で倒れているところを偶然遊びに来ていた堺家に助けられ、引き取られた。

年齢、生年月日、誕生日、名前はまったく分からず正登となずけられる。

成績優秀、スポーツ万能、おまけに学校の生徒はおろか先生までも

正登を信頼していた（生徒会長も務めていた）。

現白皇学院（前潮見高校）で剣道部所属。いつも頼られる存在だつたため、

自分をリードしてくれる峻達を尊敬している。

また、峻が正登の拾われたとこがハヤテが自殺したとこから近いため、

ハヤテだが記憶を失っているのではと疑っている。
ちなみに家族構成は義父、義母、姉の4人家族。

次に日の朝、三千院家の別荘では大騒ぎになっていた。

それは当主のナギがいなくなっていたのだから

当然だらう。特にマリアのあわてつぶりは尋常じやなかつた。

そのあわてつぶりに峻達も唖然としていた。

いつもは冷静なマリアがおどおどしているのだ。

ろくに紅茶もいれられないのだ。

しかし逆に、それほど心配してくれる人がいてくれる

ナギがつらやましいと正登は思つっていた。

峻達がナギを探し始めて約30分後、

S P達があわててやつてきて

「先ほど、このよきな手紙が届いてました」

その言葉にすぐ反応したのは峻だつた。

すぐS Pから手紙を受け取りしばらく手紙を読んでいたが、

「皆見る！」

と言つと峻はその手紙を皆に見せました。

「三千院家に皆さんへ

三千院ナギは我々が預かつてゐる・・・

返して欲しくば身代金10億持つて

港近くの 会社の工場に来い

そもそもば人質を殺す。」

それは、身代金を要求する脅迫状だった。

それを見たマリアはすぐにS.P.に10億を持ってこさせた。

その光景を見た正登は、

「それ、10億ですよね？」

「ええ、そうですよ」

「いやいや、そうですよじやないですよあげちゃダメですって「でもこいつしないとナギが助からないし、10億ぐらいで助かるんでしたら

別にこれぐらい払つてもいいんですよ」

「いやダメですから（ていうか金銭感覚なさすぎでしょ）」

「そうだマリア。あげる必要はない」

「でもどうするんですか？」

「あげるフリをして相手を倒そう」

皆は峻の意見に賛成した。問題は誰が相手を倒すかだつた。

すると、正登が

「倒す役目は僕に任せてくれださい」

「えつ？いいのか！？」正登

「はい！人を傷つけるのは絶対に許せません！！僕はそういう人が1番嫌いなんです」

「よしこうだらう・・ただし無茶だけはするな

「もちろんです、無茶だけはしません。三千院さんを助けるのが本当の目的なんですから」

兎に角、峻達は犯人とナギがいる場所へと向かつた。

「おーい、約束通り来たぞ」

「ふん、やつと来たか。こっちに金を見せな

「その前にナギを返してもらおう

「それはできないな、まず金だ金を見せろ」

「じゃ、ナギを見せろ」

「いいだろう、こっち来な」

そういうて向こうへと歩いて行く犯人についていくと・・・
ナギが椅子に縛られて座っているのが見えた。

その周りには、他の2人の犯人がいた。

「さあ、人質は見せたぞ早く金を渡してもらおうか」「分かつた」

そう答えると峻は金の入ったバックを渡そうとした。
しかし、正登のそれを止められた。

「正登！？」

「貴様、何してる」

「お前らみたいな奴に渡すかねなんてないよ」

「なんだとお、調子に乗るなよ」

そういうと犯人達は日本刀を出した。それを見た正登は、「来い！ダークデスナイト」

すると、頭上から真剣が現れた。それを見た正登は構えるといきなり飛び出した。

しかし、次の瞬間皆は目を疑つた。

正登は、そのまま歩いていつてナギの近くにいつたからだ。

「大丈夫ですか？三千院さん」

「ん？あ・・ああ大丈夫だぞ」

「そうですかそれはよかつたです」

そんな話をしていると犯人達は

「お前、ナメてんのか」

と言つと日本刀をかざして正登に襲い掛かつた。

「甘いな」

正登がその言葉を言つた瞬間、襲い掛かつた犯人達はなぜか吹つ飛びました。

「真剣奥義やはす斬り！－！」

そう言つて正登が真剣をしまうと犯人達は倒れた。

「正登君？ あの人達大丈夫なんですか？」

「まあ、悪者だからいいでしょ」

「いやいやダメだろ」

「ナギが突っ込んだ。

「いいんですよ。悪い事した罰ですよ」

と正登は笑顔で言った。

「いやいや、なにさわやかな顔で堂々と黙りこるんだ」

「いいんじゃ・・・」

と正登が言いかけた瞬間、峻が言った。

「まあ、生きてるんだいいとしてまさか

真剣奥義やはす斬りを使う奴が俺以外にいたとはな・・・

「えつ？ 峻さんも使えるんですか？」

「ああ、使える。まつお前ほど威力はないと思うけどな」「ていうかそんな会話してないで私を助けてくれないか？」
とナギが割り込んできた。

その言葉に正登が

「あ、すみません。今助けてますよ」

と言つと正登はナギを助けた。

「ふう、やつと助かつた」

「大丈夫？ ナギ」

「ああ、大丈夫だぞ」

「心配したのよ」

「大丈夫だつて」

「まったくそんなこといつてるがお前は昔と違うんだ、
今は当主なんだからな・・・死なれては困るんだ」

「ああ、分かつたよ兄さん」

それを見ていた正登が、

「三千院さんつて峻さんに弱いんですねえ～」

「いや違うぞ！！ ただ兄弟の関係だからということだぞ」

「えー？ でもそれって弱いって事じゃないんですか？」

「いや・・・それはその・・・」

「いいにくいんですか？」

「兄さんはとっても頼りになるし・・・」

「ふうんそうなんですか？」

「ええ、ナギはそういうこともあって峻を副社長に任命してるので

すよ」

「はは、なんだかすこしだすねえ」

「ていうか帰りましょうか」

「そうやな和哉さん」

「そういえばお腹減りましたね」

「ナギを助けるためにずっと朝から探していたからな」

そういうとS.Pに犯人達を任せて三千院家の別荘に戻つてきました。ちなみに、現在の時刻は11時30分です。

「さて朝ごはんでも作るか」

「では私が作りますよ」

「いえ、マリアさんは疲れているでしょうから、僕が作りますよ」

「え？ いいですよ正登君は客なんですね」

「いいですよ。マリアさんあんに心配して疲れたでしょう。あまり疲れている状態で仕事をするもんでありませんよ」

「いや、でもそれは・・・」

「いいじゃないかマリア、それに正登の作った料理を

俺は食つてみたいと思うぞ」

「私もだ。マリア無理はいかんぞ」

「私も食べてみたいですね」

「正登の作った料理うちも食べてみたいわ

「俺も食べてみたいな。ていうか正登君はそういう女の子っぽい

趣味があつたんだね」

「いや、それはべ・・・別にいいじゃないですか？」

「私も食べてみたいわ、マリアさんたまには息抜き

してみるのもいいんじゃないですか？皆がせっかく言つてくれてる
んですよ」

「では皆さんがそんなにいうなら、正登君頼みますよ？」

「はーーー任せてくれーーー」

と言つと正登は厨房へ向かつた。

正登は厨房へ行くと目を丸くして驚いていた。

そこには大量の食材があつたからだ。しかも全て高級食材
となれば驚かないわけがなかつた。

しかし、いつまでもとまつてゐるわけにはいかないのでとりあえず
料理を始めた。それから1・5分後

「よしー！ できた。うんまあまあかな？」

と言つと正登は料理を運んでいった。運んで食堂まで持つていくと
ナギが

「おおー！ うまそうだな」

「ありがとうござります！」

どんなものだつたかといふと・・・・

シーフードサラダ、米沢牛のソテー、コーンスープです。

これが昼食のメニューか？ といふ声はほつといてナギ達は食べ始め
ました。

ちなみに峻はトイレに行つていてまだ戻つてきていません

「ん！ これはうまいな自分」

「ええ、これはおいしいですね」

「正登君つて料理うまいんだな」

「確かにこれはうまいわね」

「うむ、レストランのメニューにでてきても不思議ではないな」

「これはうまいですね、正登君感動しましたよ」

「皆さんありがとうございます」

「くえ、そんなにうまいのか？」

と峻が言つた。ナギ達は心配になつた。なぜなら峻は

自分がとても料理がうまいため、料理にはこだわりがあつたからだ。

峻は一口食べた。正登はどんなことを言つたか期待していた。

「うん、これは『つまらないナギの言つどおり』レストランにでても

不思議じゃないな」

「峻さんありがと『わざわざ』ます」

「でも、兄さんがあんなにほめるなんて見たことないよな? マリ亞」「たしかに峻はこの前は世界でも有名なレストランにいつても

おいしそうていわないうらしきびしいですからね」

「これは本当においしけな。ま、俺には及ばんけどな」

「え? 峻さんも料理するんですか?」

「おお、するぞ」

「峻の料理は私達がいままで生きてきた中で

1番おいしいんですよ」

「そうなんですか?」

「うむ、とてもうまいぞ」

「いいな、料理うまくて・・・

そういえば咲夜さんも料理つまじよなあ~」

「え? そないなことないで和哉さんなに言つてんねん! ! !」

そう言つた顔は少し赤くなつていた。

「いや・・『じめん・・』

「やつこや、和哉さんも料理つまいやないか

赤くなつた顔で咲夜はそう言つた。

「いや・・あれば料理じゃないでしょ」

和哉も顔が赤くなつていた。正登が

「お2人ともなに顔を赤くしてるんですか?」

するとナギが正登に小声で言つとしたのか

近づいたがあきらかに皆に聞こえる声で

「咲と和哉はいちゃいちゃしてるとんだ。正登、

お前勝手に入つていつたらダメだぞ」

その言葉にさらに顔が赤くなつたが正登の言葉で2人は限界まで赤くなつた。

「へえ～、そうなんですか。でもそうやつて赤くしてこると
僕はいじつてみたくなるんですよね～」

「（あかん、あいつあきらかにSの皿にはいつとる
このままじゃなにされるかわからん）」

別の話題振らんとかなり・・・いや絶対ヤバいで
そ・・そや伊澄さんも料理上手やつたやん？」

「え？まあそうだけど・・・」

「へー、鷺ノ富さんも料理うまごんですか～～

「うむ！伊澄の料理もうまごぞ」

「もういうナギもうまごじやない

「えつ？二千院さんもうまいんですか？

じやあ全員うまごじやないですか

「確かに、いわれてみればそうだな」

そんな会話をしているうちに皆は食べ終わっていた。

「あ、皆さん全部食べましたね。」

と言つて、皿を片付けた。

その後は何事もなく、時間が過ぎ

峻達は東京へと帰つてきた。

「（じやうちらはこれでひとまず

帰るわ。また明日な）」

「ああ、いつでもきてくれ」

今、向こうの高校は夏休みという設定です。

「（じや、S-P！正澄を家へ送つてやれ）

「今日はいひことありがと」

「いえいえ、（じやうちらこそとてもいい体験ができました
ではまた会えたらあいましょう）」

と言つと正澄を乗せ、車は去つていった。

ちなみに、伊澄はナギの家に泊まることになつていて
峻とヒナギクは屋敷内の別宅に住んでいる。

まあ、一緒に「」飯を食べるし、ナギ達の屋敷にはヒナギクと峻
それぞれの部屋があるため別宅と言つても
部屋みたいなものらしい。

さて、それは置いといて一方の正登はと言つと

「では正登様お休みなさいませ」

「あ、はいありがとうございました

（ふう、ＳＰの人達まえから思つてたけど「わいよなあ」）

注：たぶんこんな考え方は正登だけです。違うかもしれませんが・・・

・

そんなこんなで1日が過ぎた。

いろいろあった今日1日峻達にはいつものことだつたかもしれないが
正登にとつてはとても貴重な体験だつた・・・はず

この1日をさかいに正登の新たな人生が始まつとしていた。

それは次回に続く。

1-2話（後書き）

どうでした？なんか話がずれているような・・・

まあ、我慢して読んでください。

どうか評価してくださいお願ひします！

全然ダメとかでいいんで指摘された

部分は必ず直していきたいのでお願ひします！

13話（前書き）

森和哉・・・・

アメリカ有名大学に通つており、咲夜と結婚をしている。成績はまあまあでスボーツもかるが大学の中で人気のある咲夜と結婚

したためクラスメートにからかわれることが多くなつたが本人はそつちのほうが好きらしい森家の家族構成は父、母、弟、妹2人の六人家族である

り出来

「なあ、正登お前執事やらないか？」

なんでしきうこれいきなり会話から出てきたのでよく分からぬ方のためにはどうやってこの場面になつたかを振り返つてみたいと思います。

充実した1日の翌日、正登はなぜかこの寒い中外にいた。

「ん？ もう朝か・・それにしても眠いし寒いなあ～」

なぜ正登が外で田代めたかと言つてある理由があつた。

これは昨日の家に送つてもらつたときによかのせゐ。

家の中に入ると、姉が田の前に立つていた。

「なにやつてたの？ こんな時間まで」

「何でもいいじゃん姉ちゃんに関係ないよ」

この女性は堺詩織。つまり正登の姉だ。

もともと堺家で生まれ、現在大学3年生だ。

正登が堺家に来ることに1番賛成し、喜んでいた。

いつも正登のことを気にしてくれている優しい人なのだが正登にとつてはかなーりおせつかいでうつとしいらしい。そんな姉だから今回も正登を心配してのことだつたがこの優しさが事件に発展するとは思わなかつた。

「（あ～いつもいつもつとしひな～）」

そんな事を思いながら正登は通り過ぎようとした。

いつもなら、仕方ないわねと言つてそのまますんなり終わるのだが

今回は違つた。

「待ちなさい！ 正登！ それはないでしょ こんなに心配してたのに・・

「

なぜこんなに心配しているかと言つと正登が家に何日も

帰つてこなかつたからだ。まあ正登と峻がそれぞれ家に電話をして

いることから

親がこの姉に伝えていないことが分かるだろ？。

ちなみに両親は外出中で今はいない

「（まいつたな、義母さん達伝えてくれてないのかよ・・・

）いつなつたら姉ちゃん止められないんだよな・・さしごうするかな

義母さんに電話は一応したんだけどさ・・・」

「うそを言わない！お母さんは電話なんかもらつてないって言つてたわよ」

「（げつ！？あの親ど忘れしてやがんのかよ）」

「どうじうことか説明しなさいよ」

正登は全て昨日までの自分の出来事を話した。が信じてもらえるわけがなかつた。

「そんなのうそでしょ。そんなバカな話があるわけないじゃない」「確かに知らない他人にいくら似てているという理由で家に泊まつたり、その人の墓にいけるなんてバカげた話だつた。しばらく言葉の言い合ひをしていた2人だがついに、詩織がキレた。

「うるさいわねもういいわ」

と言つた瞬間正登は殴られていた。

「痛てつ！なにすんだよ」

「あんたなんかどつかいけばいいのよ！！」

と言つと詩織は自分の部屋へと戻つていつた。

最初は啞然としていた正登だが

「ああ、いいよどこにでもいってやるよ」

そういうと必要な服などをまとめ家から出て行つた。

そして正登は近くの公園（負け犬公園）のベンチまで行くと

そこに座つてそのまま寝てしまつた。

このあと冒頭の部分が入るのだ。

目覚めた正登はさっさと学校へ行く準備をして学校へと向かった。まだ時間は早かつたが学院内なら暖房もついているのでそのまま外にいるよりはマシだった。

それから1時間半ぐらいたつと8時30分となり授業が始まった。白皇の授業は普通の高校と違い1つの授業が2時間の5時間授業で大変だったが

勤勉で成績優秀の正登には関係なかった。

注：これもこの小説独自の校則です。通常こんなに長くない・・・は

ずです。

それより、正登は前の学校で生徒会長をやっていたこともあります。大変人気があった。特に女子からは絶大の人気で授業が終わるとかならず周りを囲まれるのであっては正登も苦痛だった。

おまけに正登の周りに女子が集まるこことによって男子達がかなり正登を

キツい目で見ていた。しかし、正登が剣道部で初日から部員をコテンパンに

したことは皆知っているためせいいぜい裏で陰口を言つぐらうだつたがそれでもこの悪循環はかなーりきつかった。

しかし、授業が終わつて学校が終わるとときはすがに女子も周りに来なかつたので

HRが終わると、担任でもあり部活の顧問でもあるヒナギクの所へ行き、

今日は部活があるかどうか聞いてみた。

「桂先生、今日は部活あるんですか？」

するとヒナギクは困つたような顔をした。

正登はなんだろうと思つたがふと思い出した。

自分が部員を倒して怪我をしたから部活などできる状態ではないこ

とを・・・

「あ、そういう部活はできませんねあれは僕のせいです。すみません桂先生」

「いいのよ、それより私のことは学校でも桂さんと呼んでいいわよ
はい分かりました」

「それより、今日ヒマ?」

「なんですか?桂さん」

その言葉にそこにいたクラス全員が固まつた。
そりや そうだろう校長もヒナギクのことを先生と呼ぶのについ何日
か前に入ってきた生徒が
桂さんと呼んだのだから・・・

特に、男子の反応はヤバかつた。ヒナギクは生徒からとても人気が
あり

ファンクラブまで結成されているなどかなり信頼を得ていた。
正登は周りから聞こえてきた声を聞き取つた。

「おい、あいつ今桂さんで」

「ああ、言つてたあいつ何様のつもりだよ」

その言葉に正登の勘が言つていた。正登は小さい声でヒナギクに話
しかけた。

「(まずい、これは非常にまずい空氣だ。なんとかここから抜け出
さないと・・・)

とりあえずその話は他のところでやつません?」

「あ、別にいいわよ。じゃ一緒に帰りましょ」

「それと・・正門までは別々に行きましょうなにせらヤバい空氣が
今流れているんで」

「分かったわ、またあとでね

それから約10分後ヒナギクと正登は正門の前にいた。
「さて帰りますか」

「正登君! 今日ヒマ?」

「え? いや・・ヒマつていうか・・その

「どうしたのー?」

「それが・・・昨日家で姉ちやんとケンカして家出してきたのでヒマつて言つてか帰るところがないというですね状況・・・」

「じゃ、ヒマつてことね?ていうか大変ね」

「ええ、そうです。でもどうしたんですか?」

「ナギがあなたのこと呼んでるのよ」

「え?三千院さんが?では早速行きましょうか」

「ていうかもう田の前なんだけど」

「あ、本当ですね」

ヒナギクと正登は屋敷内に入つていった。屋敷の中を歩いてみるとマリアが

待つていたように立つていた。

「あ、マリアさん。」^{まちな}「

「こんなにちは正登君では」^{まちな}「あらへ来てください」

「正登君こつちよ」

マリアとヒナギクに言われるまま正登はつこつこくとナギの部屋へと通された。

「おお、正登よくきたな」

「ええ。で、三千院さん何か僕に用事ですか?」

「お前、アルバイトつていうか仕事してみないか?」

「えつ?仕事ですか?・・・そうですね~なにかしたいとは思つていたんですが・・・なにかいい仕事あるんですか?」

正登がナギに聞いた。

「うむ!一つ紹介したい仕事があるんだが・・・

「なんですか?」

「私の執事をしてもらいたい」

「は?それは三千院さんを^おねむとか^おつこつ系ですか?」

「うん、まさしくそうだ」

「その仕事をするつて」^は俺の執事もやるつて」^はだよ^はこのいのか

?」

「あ、峻さん。うん確かにそうですね」

ここで峻達は正登が口にした言葉に戸惑つた。（ヒナギク以外）

「その仕事つて住み込みで出来るんですか？」

「え？ あ、うんできるけど」

その言葉に安心したのか

「（）のままで生活しててもなあ、なら（）の家に住みながら仕事をするか）ではその仕事をさせていただきます」

「ほ・・本当か！？」

「ええ、本当ですよ」

「では早速正登の家に電話をしないとな」

しかし、その言葉に正登は急に不機嫌な顔にかわった。

「ん？ 正登どうした？」

しかし、正登からの反応がない。そこでヒナギクが気を利かせて正登の代わりにナギ達に昨日の正登の家の事件を話した。

「それはまた大変な事件に巻き込まれたな正登」

「ええ、ホント大変でしたよ」

「ま、これでとにかく執事決定だな！」

「はい！ これからよろしくお願ひします！ ナギお嬢様、峻様」

「おお、頼むぞ」

「ま、頼むよ。それと前理事長（葛葉エリカ）が久しぶりに帰つてくるつて言つてから

お前の学年主任と学院の総責任者となつたからよろしくな

「はい！ 分かりました」

その頃、正登の姉・詩織は両親から電話していたことを知り、家を出て行つた正登を探していた。

「（正登に悪いこと言つちやつたわね。私が人の話を聞いて行動していればこんなことにはならなかつたはずなのに・・・。ごめんね正登待つて今見つけ出すから）」

そんなことを考えていると自然と目から涙がポタポタ流れていた。

「（ダメよこんなことで泣いてたら絶対ダメなんだからはやく

正登を見つけなくちゃ」

しかし、三千院家の屋敷内にいた正登を見つけられたわけもなく結局見つけ出すことが出来ず、家に帰ってきた。

「詩織……気にしないで」

「うう……私が理由も聞かないで追い出したから……」

「詩織気にしないで。正登のことだからけやんと立派に生活しているわ

だからあなたが正登のことの信じてなきやダメよ」

「うん……わかつたわ」

わてそんなこんなで正登の激動?の一日がおわった。

13話（後書き）

なーんか今日は納得いかないっていうか・・・
終わり何処が微妙になってしまったので読みづらいかもしません。
次回は三千院家の日々みたいなものを書く予定です

14話（前書き）

堺詩織・・・・

堺家の長女。とても責任感が強くて心優しい人だが正登に言わせればかなーりのおせつかいらしい・・・。家族構成は祖父、父、母、妹、兄、弟、正登の7人家族である。

激動？の1日だった10月24日。その翌日
正登は新しく自分の家となつた三千院家の屋敷で用覚めた。起きる
なり正登は思つた

「はあ、やつぱこ」でかいよなこの部屋だけで僕の部屋の何倍ある
んだろう？..

ていうかもう一生これないと思つていたのにまさか住むことになる
とはな

今僕つて幸せだなあお嬢様と峻様に感謝しないといけないなあ～
よし！僕のためにこんなことをしてくれた2人に喜んでもらうため
に頑張らないとな

そんなことを1人でぶつぶつ言つていると

「朝からじ立派なことをいっていますね正登君は」

「うわ！？ま・・・マリアさんいつからそこに？」

「こいつからつて言つつか・・・」この隣の部屋は私の部屋ですからね。
起こそうと思つて起きたらじ立派な宣言されていらっしゃつたんで
しゃつべているとき声はかけないでいたんですよ。

これからしばらくつていうかナギのお供をしてもらいます。
ですので学校にはあまりいけないかもしが頑張つてください。
い。

ではまずナギを起こしてきてください。今日は大事な仕事があるので
無理やりでもかまいませんので起こしてきてくださいね

「はい、分かりました」

正登は、ナギの部屋の前まで来ていた。

”しかし、この屋敷ホント広いなあ”と思いつつも、

「お嬢様～、朝ですよ。起きてください」

しかし、反応がなかつたので部屋に入ることにした。

「お嬢様、おはようござります。」

正登は、入った瞬間に田に映つたのはナギと猫といつぱのトラが一緒に寝てゐるところだつた。

「あれつて、峻様言つてた猫だよな」

そんなことをぶつぶつ言つているとナギが起きた。

「ん・・・おお正登か・・・おはよう・・・ていうかなんでそんなに固まつてるんだ?」

「いえ、後ろ・・・・・」

「ん?・・・あ、タマまた一緒に寝てたのか」

「(ええつー?これつて日常茶飯事なのかよ?)」

正登は心中で突つ込んだ。すると、

「ククク、それでは立派な執事にはなれんぞ」

「その声はクラウスさんつて、下でしたか」

「お前は何をやつているんだ!!」

ドカツ、バキッ、ゴスツ(ナギがクラウスを殴る音)

「はは、ていうかその後ろのタマつてホントに猫なんですか? どうみてもトラですよね・・・トラを野放しにするのは危険なのでは?」

すると、タマが正登の方に顔を向けた。

「ふふ、どうやらタマの機嫌を損ねたようだな

タマはお嬢様、峻様、マリアにしかなつていいないバカ猫!!

暴言を吐いたものは抹殺されるのだ

「ということはクラウスさんにもなつていなつてことなんですよ?」

ではクラウスさんも危険なのでは?・?・?

「そ・・・そんなことはないよなあ、ターマ」

ドコツー!タマの爪がクラウスの顔にヒットし、クラウスは壁まで吹き飛んだ。

タマは正登に目を向けるといきなり襲い掛かってきた。

するとナギが

「ひひー！タマ部屋の中で暴れるな」

と言つとタマは正登の手前でとまり急におとなしくなつた。

「あ・・ありがとうございました」

「またくお前は三千院家の猫として少しほわかまえりーー遊ぶなら外でやれーーー！」

と言つとタマは正登を口にくわえて窓をやぶつて外に出た。

正登はタマをつかむと

「クソ、調子に乗るなあ」

そのままタマを投げ飛ばし、着地してひしゃくした。

「いくらお嬢様のペシトだからって調子に乗るなよーーー！」

それをみていたナギが言つた。

「正登ならタマの相手してやれそудだな」

「それはどうでしょーか？姫神・綾崎以来何人の執事候補がタマに敗れてきたことか」

「正登ならできるぞ！」

「ま、そんなに自信があるならタマに勝てなかつたら執事クビといつことで」

「いいだろうただし正登は負けんぞー！」

「（えーーー！？素手でトラに勝てなかつたらクビなんですか？）」

正登は心配になつてナギを見たが、どうみても勝つとしか信じていな

い顔をして

こっちを見ていた。

「（お嬢様達のペシトだから真剣はつかえないよなあ・・・ま、いつか拾つてくれた命だし1つこゝは言つて砕けるか）

いくぞー、うおおおおお

「お嬢様？1つ気になつていたんですが、あそこって確か・・・峻様の家庭菜園場では…？」

「ああーーー！」

さて場面はかわってマリコアのいる厨房。

「さて、朝食の準備も出来ましたし。峻の花にでも水をあげて掃除でもしますかね」

「ちいさな」と言つとマリコアは峻の家庭菜園へとやつてきた。

マリコアも昔菜園をもつていたが何度も壊されて（特にタマ）やめてしまつたらしい。

「きれいに咲いているところなんですね……」

マリアが見た場面それは正登が必死に抵抗する中頭をくわえて暴れているタマの姿だった。

スペアン、マリアが振り下ろしたまつ毛がタマの頭にクリーンヒット。そして

「タマ？ あなたはなにをやつてこいるんです？」 これは峻がとても大切にしている

花があるのでここでは絶対に遊んではダメとあれほど……」

田の前には見るも無残な家庭菜園が広がっていた。

「ああ、峻がとても大切にしている花が……」

すると運悪く峻がこけらに向かつてきついた。それに気づいたマリ

アは、

「峻、なにしてるんです？」

「ん？ 花を見にきたんだ。マリコアが丁寧にやつてくれてこいるから最近は特に

きれいだしな」

「峻、それはあとにして朝食を食べましょ」

「え？ なんでいいじやん菜園にタマが正登を引っ張り出して遊んでたわけじゃないだろ？」

その言葉にあきらかにピクッときれいしたが、峻はその動作を見逃さなかつた。

とめるマリコア」と無理やり菜園の近くまでやつてきた。菜園を見た

瞬間峻は固まつた。

その隙にタマは逃げようとするが、峻は

「タマ、これはお前がやったのか？…それとも上の2人が素手でタマに勝てなかつたら

執事失格でクビだとか言つてけしかけたのか？」「驚異的洞察力」「いや、何を言つてますか！…！」

「そ・・そ・うだよそんなことあるわけが………」

「どうなんだ正登？」

「へ？だいたいそんな感じですけど…」

「そ・うなのか…じゃあ正登の手当でが終わつたらすぐそつちこいくから

少し朝食は遅れるかもしれないが…ちょっとそこまで待つてくれないか？」

「イ…イエッサー…・・・・・・・・

「うん、まだお腹すいてないから大丈夫だよー…・・・

「でもすまんなあの2人にはキツーへ言つておくから…・・・

「い・・いえ、そんな

「じゃあ、さき行つてるから正登もすぐこいつ

「はい！わかりました

正登はタマのほうを向いて、ふうと息をはむとタマが

「てめえはいつかぶつ殺す…!…」

そういうとタマは去つていつた。正登は思った。

「（そ・うか…・・・金持ちの家のペ・シ・トつて…しゃべるんだ～

その頃、ナギの部屋では…・・・

「いや…・・・まあだから…・・・」それで正登がタマと一緒に遊べるつていうか…・・・

「世話ができるつてわかつたわけだし…・・・

「そしてその代償として俺が育ててきた花達は全滅と…・・・

「いや…・・・だからそれはその…・・・本当に悪かつたていうか…・・・

「ナギは必死に弁解しているがあきらかに峻とマコアの皿せ冷たかつた。」

すると、正登が入ってきた。

「あ、おかえり正登。なーー正登もすっかりタマと仲良くなつたよな?」

「いやあ・・・しかし、おどりのきですねー」

「ん? なにがだ?」

「三千院家のペツトは・・・しゃべつたりするんですね~」

その言葉に全員睡然としていたが

「ほひーりんなさいーーーあなたがムチャをわせるから

正登君がすっかりアレな感じに・・・」

「お前なにやつてんだ正登が変になつてゐるじやないかーーー」

「正登ーーーしつかりしりーーー」

「えーー?」

「正登ーーー私が悪かつたあーーーお願いだ許してくれーーー」

「ええーー? あいつしゃべるんじやないんですかーー?」

「正登ーーーこの世にしゃべる猫などいないぞーー!」

「これはめちゃくちゃアレな感じになつていますねーーー」

「で・・でもやつき本当に・・・」

「だ・・・大丈夫だーーーこれからは仲良くなつておひこーーー・・・
なーーー」

愛情に囲まれ育つたタマは、いつしか人語をしゃべれるようになったといつ・・・

だがーーその事実は(正登以外)誰も知らない。死んでるけど一応
ハヤテも知っている。

時間はかわって午前10時、正登はナギの仕事が相手の都合によつ
なくなつたので

「こんな男らしくない格好してこるのを執事長に見つかったら僕クビになっちゃいますよ！！」

「は？ なんだそれは」

「いえ、ですから執事長のクラウスさんが・・・

『三千院家の執事のスローガンは”執事とは漢らじくあれ・・・”三千院家の執事たる者いかなるときも・・・紳士として男らしくふるまわなければ

なりません。男女平等の時代だからこそ、あえて男らしさを追求する！！

それが三千院家の執事の姿！！だから執事たる者普段から男らしさ行動を心がけるように・・・それができないのであれば即刻やめてもらいますよ！！』

つて言つてたんですよ！！！」

「ほー。クラウスがそんなことを・・・」

「だからこんな女の子みたいな格好をクラウスさんごみつかるわけにはいかないんですよ」

「まあ、いいじゃないかとも似合つてるんだし・・・」

「良くないですよ・・・！」だいたいそうでなくともこんな格好・・・

・

マリアさんにだつてもし見られたら恥ずかしくて死んじゃいますよ！！！」

「あーそうですか・・・でも死なれるのはちょっと困りますねーー正登が振り向くと、マリアが立つて立つていた。

「マ・・・！-マリアさん！？」

「お2人でなにをしているのかと思えば・・・」

「ち・・・・・・つ！違うんです！！」これは

お嬢様がムリヤリ・・・！」

「いやあ、正登がどうしても着たいくてこいつから

「そんなこと言つてませんよ！」

「そんなこと言つてませんよ！」

「心配なさいなくとも、正登君に女装癖があるとは思ってません。」「あ……ありがとうございます」

「それにしてもまったくあなたつて子は……」

「だつて正登ならハヤテと外見が似てるから似合つと想つて……」

「似合つと思つたからつてセーラー服なんて着せたんですか?」

「そりですよ……僕は一応男なんですよ……（ふう、マリアさんが

来てくれて

助かつたな）」

しかし、これが間違いだった。マリアは、おもむろにクローゼットに近づいていくと

「正登君にはこいつのフコフコが絶対似合つて決まつてるじゃないですか……」

「（マリアちゃん……なに紹介しちゃつてんですか~）

正登は心の中で叫んだ。

「じゃあ、こいつのスカート（赤）なんぞいつかな~？」

「えー、でもこいつのスカート（ピンク）の方がかわいくないです

か……？」

「あのー……もしもー……」

「ん?少し待つてる。今いいの見つけてやるからな

「（こかん……2人のノリが完全に女子高校生になつている……）

こ・・・・このままでは僕の貞操大ピー・ーンチ……」

正登は1歩1歩ゆっくり気づかれないよう逃げ出した。

しかし、そんな簡単に逃げれるほどこの小説は甘くないのだ……

なぜかはしらないが下においてあつたPSPを踏んでしまいその音

がナギとマリアに

ばれてしまったのだ。

「どうしてくのだ?」「

「セーラー服のままでは屋敷の中を歩き回れませんわよ~。」

「いや……でもほり……仕事とかしないと……」

「つむ、感心感心。でもこれも仕事つてことで」

「うちの服もきてみません？」

「あ・・う・・キヤー———・・・・」

「ハハ・・・ひどいですよ! みんなの・・・・」

THE JOURNAL OF CLIMATE

ナギとマリアの2人はしばらく黙つていたが

「（い）れは・・・（い）」

（シヤレなうていせんわ・・・）「

「もともと素質はかなりあるとは思っていましたけど……」

二、日本の「政治小説」

「一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ」

?

11

「そんな」と言われても・・・これスカートの中がスースーしてます・・・

支那の歴史と文化

「タ・・・・・タマダメジルセ・・・・

お前がいへら動物だからってそんな少年誌ではやれなこと

を
・
・
・
」

しかし、タマは正登に襲つていつた。

「ノー！！！…………バ…………バカ！！タマ！！服は部屋にあるつ

ていうのに

こんな服でウロついたらクラウスさんに・・・・・・！だつ・・・

L

正登を木に押し付けるとタマは上に乗った。

一
わ
ハ
カ
ハ
カ
!!
お
前
三
百
キ
ロ
も
あ
る
の
に
・
・
・
・
・
・
!!

「上に乗つたら死んじゃうって！！」

「かわいいメスと勘違いして襲つてているのか、それともかわいい男の子だから襲つてているのかで、今後のタマの教育方針を全て変えていい」うと思つたが……

「まー、言つてゐ間に正登君は死にそうですが」

「…………たくこの…………も…………」

いいかげんにしろ…………」

正登はタマを首投げするとそのまま地面へとおもこつきりたたきつけた。

「ふんだ……」ぐらお嬢様達のペットだからって調子にのるな！！

「このバカトラめつ…………！」

「おお、前回結局倒せなかつたタマを一撃で…………スゲー

「300キロを首投げ…………やはり外見は女の子でも中身は鬼ですかねー」

正登は考えた。

「（しかし、）のままグズグズしちゃいられない…………早く部屋に戻つて着替えないといクラウスさんに見つかってクビ…………」

すると、近くから声が聞こえた。

「やー、それにしても今日はいい天見だな」

こんな日は庭の花にオリジナルの花言葉をつけて回るに限るな～

「（ク・・・クラウスさん！？）…………いかん…………こんな格好見つかつたら…………クビとか以前に人として生きていけない…………」

正登は逃げよつとするがこの小説はさあほども説明したよつて甘くないのだ！！

木の枝を踏んでしまいばれてしまつたのだ。

「誰かな？」この三十院家の屋敷を無断でウロつく変質者は…………

・

「（『正登です……』となほ名乗れなこよなあ）の姿では……となれば……」

正登は全速力で逃げた。

「ふ……なめられたものだな……」の屋敷の中から逃げ切れる

つもりだとは……成敗してくれる……」

「キヤ――――――！」

「おお、さすがクラウス……正登が動きにへい格好していぬとはいえ……」

「正登君のスピードについてますわ……それより

正登君を助けなくていいんですか？」

「つむ――マコア行くぞ――！」

「（こ……いかん……）の服じや速く走れない……」のままじや追いつかれる……

かくなる上はこの布で顔をおおつて……クラウスさんを迎撃するしか……

でもこれじや……前が見えないなあ……

ええい……人間にざとなれば眠れる力が目覚めるはず……自分の目ではなく……

心の目を信じるんだあ……！」

さすがにそれはこの小説の中では無理な話だ――

「クラウスキ――ツク――！」

クラウスにやられた正登はもうダメだと思つた。

「死ねえ……この賊めが……！」

クラウスがトドメをさそつとした。しかし、クラウスは女装した正登に好意を抱いたようだ。

そのままボ――――ットしてでしたが今にも襲つてきそうな顔をしていた。

「マズい、」のままじや正登がやられてしまつ……マリア急げ――

――！」

しかし、マリアが攻撃する前にクラウスが吹っ飛んだ。

「おっさんがなにときめいてんだ！！いいかげんにしり」

それは峻だった。峻はこちらに近づくと手をだした。

「ほら早く起きろ正登」

「え？ 何で分かつたんですか？」

「女装してもお前は分かるよ・・・それにしても俺がいない間になにやつてんだお前ら」

と言うと屋敷の近くからみていたナギとマリアを見た。

「じめん峻！！その・・・つい」

「じめん兄さんでもついやつちやたんだ」

「まあ・・・いいけど」

その言葉に安心したのかナギとマリアが近づいてきた。4人は屋敷に中へと戻つていった。

マリアは正登に真新しい服を渡した。それは執事服だった。

「これは執事服ですよね」

「ええ、私が昨日サイズを仕立て直したものなんですが・・・」

「え？ これはマリアさんが・・・？」

「ええ、ではさつさとクラウスさんが起きる前に着替えてください。

それと着替え次第部屋の掃除でもやつてもらおうと思います。」

「はい！！いや～それにしてもピッタリですね。見てください」というですかお嬢様

マリアさんうまいですよね・・・って、あれ？」

「悪かったな！...どうせ私にはできないよ！...」

そういうと、ナギはさつと向こうへと歩いていきました。

「あの・・・なんか僕しました？ いきなり冷たくなった気がするんですけど・・・」

「いや・・・どちらかというと・・・」

「あれは暑くなりすぎている気がするんだけどな・・・」

「ま！～なんにしても！～失った信頼は・・・仕事で取り戻してみせますよ！～」

「え？あの・・・」

「あー！これ掃除の道具ですねー！まかせてくださいー！
まずはあっちの部屋からピカピカにしてみせますからーーー。」

「なにやらこっちも・・・」

「熱くなっているなー・・・」

「残った2人は」というと・・・。

「とりあえず・・・部屋に戻つてください。なにか飲み物をもつて
いきますので」

「おお、そうだな。それと紅茶か「コーヒー」でな

「とりあえず軽く流す」とした・・・。

それから30〜40分後、峻とマリアはある部屋へと向かっていた。
その部屋とは来客者や屋敷の人達がよく休むところだ。この部屋は
ナギやマリア、峻、正登、ヒナギクの部屋から近いためよく皆で集
まることが多いのだ。

なぜその部屋へ向かっていたかと言つてそこは普通の部屋より大き
く

ビリヤードなどのゲームがあるから峻がマリアにやろうとこつてき
たからだ。

その途中峻とマリアは話をしていた。

「マリアとこつやつて2人で話すのも久しぶりだな」

「ええ、いつもならナギやヒナギクさんがいましたからね」

「ああ、しかしあつマリアも二十一歳なつたんだな」

「えつと・・・それは・・・私が実際の年齢より老けて見えるつてこ
とですか？」

「いや違うよ。マリアはいつまでたつても歳を取らないなあと想つ
ただけだよ・・・」

「あら、そうありがとつ・・・峻

そんなことを言つてゐ間に部屋へと着き、中に入るとナギがいた。

「あー、ナギなにやつてるんです？」

マリアが声をかけていたがなにか考え方をしているのか全然気づく様子がない。

「（……………）わざのよくなかつた……………
わざのよつなことでの態度では、いくらなんでも心がせまわざ
る……………」

しばらく、ボー――ーッしていただがよつやく自分で声をかけられて
いることに気づいた。

「ん？ なんだ兄さんとマコアか……」

「やつと気づきましたか・・・といりでなぜこんな所に？

この時間は書齋かと思つてましたけど」

「ん？ ああ・・・調子が悪くて・・・といひで正登は？」

「元気にお掃除をやつてこます。とてもやる氣に満ちあふれていますわ」

「そつか・・・書齋に近づかせないでくれよ。あと・・・

私のこと、なにか言つてたか？」

「お嬢さまの信頼を得るためにガンバルそうです。」

「まあ、なにか思つところがあるのなら・・・直接お話しこなつた
方がいいと思つけどな…」

「そ・・・そだな…まずはお互に話をするのが大事だな…」

「はい…」

「じゃあちよつと正登のところに行つてくる…」

「やんわり話をしてくれるんですけど…」

「ナギはどうやらハヤテ似の正登を好きになつたようだな」

「ええ、そうですね。今度こそハッピー・エンドになればいいんです
けど・・・」

そんな話をしてると、

「あの…マリアさん…一部屋、掃除が終わつたので見てもらいた
ませんか！？」

「――つて2人ともどうかしました？」

「「いえ・・・とことん噛み合わない人達だなあ・・・と」」

「でもまだ1時間も経つてませんけど・・・」

「はい・・・とりあえず手順を確認してもらいたくて・・・」

「「手順って・・・え?」」

ピカピカーキラキラー

「なんだか・・・すゞぐキレイね・・・」

「そうですか!? ありがとうございます!?!」

「(細かいところまで・・・とてもていねい・・・)

あら? これは・・・」

「はい! こちらの取っ手は銀製だったのでシルバーダスターを使って磨きました」

「え?」

「こちらの銅像は真鍮ブラシで汚れを取つた後、薄い中性洗剤で洗浄・・・

水気を取つてワックスで仕上げました。

カーペットはウール製のキリムだったのでお湯を使わず、冷水に頭髪用洗剤と塩を

加えて、色落ちしないように気をつけて軽く・・・ - - - つて、あの僕、なにかマズいことを?」

「いえ・・・素直に驚いているんですよ。ていうか感心しました。正登君・・・お掃除とても上手なんですね」

「え? そうですか? ありがとうございます!?!」

高級品は特別な手順があるのかも、って不安だったんですよ」

「いえ、全部正解ですけど・・・・・よくご存知でしたね? そんなこと・・・」

「いや~自分でもなんでだかわからないんですが、知つてたんですね~」

「ふうんそうなんだ。そいついえばハヤテも掃除上手だったな」

「ハヤテさんも得意だったんですね?」

「ええ、ハヤテ君は9歳の頃から年齢偽つて、清掃のバイトで

親の酒代稼いでいたらしいですよ」

それを聞いていた正登は思つた。その少年の端々に笑えない苦労がにじんでいるなあと

「では正登君、その調子で他の部屋もお願いできますか?」

「はい!!喜んで!!」

「（うれしいなあ一ほめられちゃつた!!よーしがんばつて掃除するわ~）」

「正登の奴、すごいな」

「ええ、本ですねまるでハヤテ君みたいですね~」

「そうだな、それよりナギの書斎のことつい忘れてたけど・・・大丈夫か?.....」

「あー? そういえば・・・でもまあ大丈夫でしょう・・・

「そうか?なんか嫌な予感がするんだがな・・・」

「大丈夫ですよ~」

とマリアは言つたが、峻の予感が的中しよつとしていた。

人に誉められた少年は、少し・・・いやかなーり調子に乗つていた
「（よーしこのまま屋敷中を掃除して・・・もつとマリアさんに誉めてもらおう!!）

そうすれば、きっとお嬢さまの機嫌も良くなるに違いない!!』『す

ご』『や正登は!!』

『こやあ~、当然ですよ~』・・・そうだ!!こんなふうになれる!!

!よーし

そのためにはまず・・・ーーーの迷路のよつな屋敷の構造を把握しなくては!!』

それから、10分後・・・

「（うーん・・・すっかり迷子だ・・・しかし本当に広いなあ・・・
いつたいいくつ部屋があるんだろう?~そしてまた・・・新しい部屋
が・・・

おもむろに部屋の中へと入つていく。

「あ・・・でもここは結構・・・人の気配がする・・・

（ん？なんだこのホールト……お嬢さまの学習ホールトかな？）・・・

な・・・」・・・「これは……」

それはナギの漫画だった。ナギの漫画は5年たつてもまったく進歩していなかつた。

「（絵日記？）い・・・いかん……」んなプライベートなものをみては！――

こんなこと・・・！こんなことお嬢さまに知られたら・・・――

「おい・・・人の部屋でなにを勝手に見てる・・・」

「お嬢さま――？いえ――こ・・・・これはその・・・――」

「あ――そ・・・それは私のマン・・・」

「だ・・・大丈夫です――ほとんど読んでいませんから・・・

お嬢さまのこの絵日記は――・・・・・あ・・・・あれ？

「え・・・絵日記・・・だと・・・・・・・」

「はい――え？あれ？」

「こ・・・この・・・・・・・バカア――」

「お・・・お嬢さま！？」

「人の気持ちも知らないで――正登のバカ――バカバカバ――カ！――もう出て行け――！」

「あんなに怒らせてしまつては・・・もう会わせる顔がない・・・（あれは・・・よっぽど大事な絵日記だったのだろうなあ・・・）

わざわざなら僕の平穏・・・短い間だつたけど・・・ありがとう・・・

「――」

そういふと、正登は去つていつた。それを見ていたマリアは、

「ナギ？いいんですか？」

「? なにが？」

「正登君、ホントに出ていつてしまつましたけど・・・・・・・・・・

「は――いやいや――私は部屋を出て行けと言つただけで、屋敷を出て行けなんて言つたつもりは・・・・・・・・・・・・・・

「あ～～・・・そうですか。でも外は寒そうですね～・・・・・
こんな寒空の下、帰る家もないのに追い出されたら・・・・・・・・
さぞかし辛いでしょうね～～・・・・・・・・

「わっ・・・・私は部屋を出て行けと言つただけだ！・・・それなのにな
にを・・・・・！」

だいたい出て行けと言われたぐらいで本当に出て行く奴がいるか！・
まったく・・・あの根性なしめ！・・・それに掃除とはいえ、人の部屋に
勝手に入るなど・・・・・怒鳴られたつて文句は言えまい！・・・

「まあ、ブチ切れたホントの理由は部屋に入られたことよりも・・・

「せっかくの自信作を『絵日記』よばわりされたことが大部分を占
めてるようだ
感じるけどな・・・・

「そもそも自分の大事なものをきちんとしまつクセをつけないから、
こんなことになるのですよ？・

「田頃から部屋の掃除はマリアまかせ。着ていたものは脱ぎっぱな
し。

身の回りのものくらい自分で整理整頓するクセをつけなさいと
いつもあれだけ言つているのに・・・・

完全に説教モードに入った2人に対しよつやく自分のした行動を反
省し始めたナギであつた。

「それにあれは正登君の失敗といつより・・・ちやんと注意しなか
つた

私の失敗ですし・・・いいんですか？・・・・・・・」のままで？・

「・・・・・・・・・・・・

「まあ・・・・でもお嬢さまがそこまでおつしやるのですから・・・・
仕方ありません

正登君のことはこのまま忘れましょ～～・

「え？」

「元々正登君はお嬢さまが独断で雇うと決めただけの人・・・・

そのお嬢さまが用なしとうならぬや引き止める理由もないです

「え？ いや… … ! ? それはその… … ! !

「正義感の火炬キャリー」なったのであれど、むしろこのままのまつが・・・」

「やーー! だからキライになんか——」

「なんか？」

うなマネ・・・

三千院家の人間として・・・するわけにはいかん！！」

「右と言ふは左 左と言ふは右」

「なにか聞こえました？」

「でもじつはひで正登君を探し出すんだ？」

「…そしたら、それが問題なのだけれど…どういえども、」の周辺を捜索する
クラウス、SP達を至急配置しろ。正登をならず見つけ出せとな
「…・かしこまりました少々時間をください」

「は!?」
「あー、兄さん、彼は来るわ」

「おなかにいたるといふことは、今朝も『おなか』といふにあつたな』

けと
けと
怒鳴り一けた手前会いへて……それでマリアと俺に行

言つていゐのか?」

- 1 -

「お嬢さまは玉置君の主ですね？」

「…………じよ…………冗談だよ冗談！！私も一緒に行く

11

決まっているだろ！？」

「……………」

「よし、こへぞ」

その頃、正登はといふとなぜか九十九里浜まで来ていた。
どうやってこの短時間に100キロ離れたところまで行けるかと言
う疑問は置いておこう。

「ふう、これからどうかな。どうせなにもする」とないよ
なあ」

そんなことをつぶやいていたとき天使と悪魔が現れた。

「正登！お前はお嬢さまに悪いことをしたんだぜ

だからそれを償つて死ぬんだ」

「ダメですあなたは死んではダメ。せつかく拾つてくれた命を無駄
にしてはいけません」

しばらく言い争つていたがだんだんと悪魔の意見のほうが強くなつ
てゆく。

しかし、天使の一言により情勢は一変する。

「あなたはお嬢さまになにかしてあげました？なにもしてませんよ
ね・・・」

いいんですか？救つてくれた命を無駄にして・・・

あなたの人生はそんなに小さいものなんですか・・・

お嬢さまの願いはあなたにそばにいてほしいんだけなんですよ・・・

」

この言葉に正登は納得したのか再び屋敷の方へと歩いていった。

その頃、ナギ達は正登を探していた。

まあ、正登は九十九里浜にいたから見つかるわけもないんだが・・・
正登を探している時、ある人に声をかけた。

「あの・・・ちょっとといいですか」

「はい？なんでしょうか？」

「えーと、Jの子を探してるんですが……知りませんか？」
マリアはそういうと正登の写真を見せた。すると、向こうの人が聞いてきた。

「あの……Jの子の写真はいつ……？」

「え！？えーと昨日ですけど……なにか」

「私はこの子の姉なんです！」

「え？ とこう」とはあなたは堺詩織さんですか？

「ええ、そうです。あなた方は？」

「私はマリア、Jからは正登君を執事に雇っていた三千院竣と妹のナギです」

「そ……そなんですか？ といひで正登がどうかしたんですか！」

「ええ、それが屋敷を出て行つたきり……『そんな』とより早く行くぞ……」

マリアの言葉を制止しちつたといつてしまつナギであった。

そのあとをマリアがいそいで追いかける。それを見ていた峻が
「いや、すみませんね。でもナギは正登を気に入つてまして
今はそれしか頭にないんですよね……あッ、あなたも来ますか
？」

「ええ、お願ひします」

「では、こきましょ」

正登はもう屋敷の近くまで来ていた。正確にいえば負け犬公園のところまで来ていた。

公園のところまで来て再び正登に戸惑いが訪れた。
自分はこのまま屋敷にもどつてなんにもなかつたよつこしていいの
だろ？

いろんな思いが交錯してなかなか屋敷へとむかわない自分に腹を立てながら、

公園のベンチに座つていると、ナギが声をかけてきた。

「ようやく見つけたぞ！ 正登」

「あ・・・お嬢さま・・・」

正登は心配になつた。まだ怒つてゐるのではないかと・・・。それを考へると、

なかなかナギの顔を見れなかつた。『まだ怒つてゐるよな やつぱり戻らなかつた方が

良かつたのかな・・・』そんなことを思つてゐるとナギが正登の顔を強引に

自分の方に向かせた。正登はその行動に驚いていたがナギの顔を見て、さらに驚いた。

怒つてゐると予想した自分に反し、ナギは笑つていていたからだ。

「心配したんだぞ正登！」

「お・・お嬢さま・・・まだ怒つてませんか？」

「いや怒つてない。私は心配だつたんだ・・・『めんな・・正登』

と言つた瞬間、ナギは正登に抱きしめられていた。

「あ・・ありがとうございますお嬢さま・・・」

「うわ・・・お前にんなとこを見せんとマリアが見てたらどうするんだ！？・・・」

て、もう見られてるではないかあ～！！」

その様子を聞いていた正登も急に恥ずかしくなつてナギから離れた。しばらく2人は顔を赤くしていただが、ナギが

「ほら！正登早く帰るぞ！～」

「待つて、ナギ。正登君も待つて。もういいですよ」

マリアがそうこうと詩織が木の影から現れた。

「正登、『めんね、私が悪かつた。あやまりたいの。

もちろんあなたの今この状況だから家には連れて帰らないわ・・・でも一つ謝らせて、『めんね・・・』

「こりなこよ、そんな言葉・・お嬢さま帰りましょ～」

「おー？・・おひ、兄さんとマリアも急げよ」

「いじんですか！？引き止めなくて・・・？」

「もう・・いいんですあの子は怒つてゐる。ではまた会えたら会いま

しゅう・・・・・

と言つて詩織は帰つていつた。

こつして長かつた1日が終わつた

・・・・・。

14話（後書き）

皆さんお久しぶりです！最近忙しくて更新が遅れました。すみません。

今回は、三千院家の「一日」と「二日」とでやつてきましたが長くて読みづらかったらすみません。

最初の方は「ミシクス第1巻を下敷きに少しアレンジをしてみました。最後の方は自分で考えたオリジナルだったんですが、いまいちうまくいかなかつた・・・

まあ、次回も読んでみてください。

いろいろあつた10月23日、その次の日のこと。

昨日の出来事があつたせいか、疲れているのではと踏んだナギは正登に休養を出していた。正登は最初嫌がつていたがナギがどうしてもと叫ぶので

休むことにした。しかし、正登は休養をもらつたものの何をすればいいか分からなかつた。

が、せつかくの休みなので学校へ行くことにした。だが行く途中峻とヒナギク

にとめられた。なぜかと思ったが峻に言われた。

「おー、お前今日は学校ないぞ」

「え? ないんですか?」

正登は一瞬驚いて聞いた。

「ええ、今日は帰つてきたいかげんな理事長の理不尽な都合で休みなのよー。」

「まあ、そう怒るな・・・」

怒るヒナギクに峻がなだめている。するとマコアがやつてきつていつ言つた。

「では、お金をあげますので携帯でも貰つてきてはどうですか?」

と叫ぶとマコアはお金を差し出した。中身は30万だった。

「どうもありがとう!」それこます・・・つてこれ30万円も入つてないですか!?」

「それは今日せつかくの休みなのでどこかで遊んできてもこよつにといれたんですが

「ええ! ? それは入れすぎでしょ!」

「まあ、あまつても困るんで全部使つてきてください」

「はあ、わかりました(ずいぶんなれただけどあいかわらず金銭感覚ないな・・・)」

正登はそう思いながらこいつとしました。

「ではもうこきますね」

「あ、ちょっと待つてください。帰りにでもこいんで紅茶の茶葉をこの紙に書いてる

店に買ひにいって貰ますか？そちらの店の方にはもうお金も払つてますし、

向ひの方でこいつも買ひこますから種類は分かつてこますので”三千院家の者です”と書えればくれると想つのでお願ひでありますか？

「はい……わかりました。それぐらいになりますよ」

「そうですか、ありがとうござります。あ、それとこれから出かけるときは

この服を着てもらこますよ。まあ夏は無理でしうけび……」

「あの……このコートつて……もしかして、カシミニアでは……？」

「あら？ ソうですけどよくおわかりになりましたね」

「そりや……手触りが……でもいいんですか？ もし外で汚れたりしたら……こんな高そうなコート……」

「あはは、何言つてるんですか？ 正登君……」

高そうなコートではなくて、高いコートですよ

「（……そこ訂正する場所なんですか？ マリアセ）」

「そのコートは特別に作つてもらつた超高級なものです。1着300万はくだらないので……絶対に汚さないでくださいね

「イ・・・イエッサ～～……」

「こやー、それにしてもこんな高いコート緊張するな～

（まあこのコートもだけど30万も持つてゐし、お金をなくすとか、コートを汚すような」とはないと想つたが、……やせり少しほきをつけなこと……」

その時、正登の田の前にペンキが落ちてきた。

うわっと正登は驚きながらも飛び散るペンキをなんとかよけた。

上にいた人が

「あ～、すみませんね。カシミアの超高級コートについたら

絶対落ちないタイプのペンキ落としちゃって・・・」

「あ・・・はあ・・・まあ・・・気をつけてくださいね・・・」

「ああ！～そんなところで急に方向転換したら・・・
カシミアの超高級コートについたら絶対落ちないタイプのゼバツつ
が！～」

「うわ！～」

正登はゼバツとゼバをさつと手にとり濡れるのを防いだ。

「おお、すまない！～危なかつたな少年！～」

「い・・・いえ・・・気をつけてくださいって

菅原さんじやないですか！～」

「ん？おお、正登！～見慣れない服着てたから見間違えたぞ！～

お前どうしたんだ？そんな服着て・・・」

正登は菅原さんに今までのことを話した。

「ん～・・・、そりゃーヒドいめにあつたな」

「いえ、でも今は三千院家で執事をやつていますから樂しいですよ
などと会話をしていると突然大きな音がしたと思つたら、

「うわー大変だー！～カシミアの超高級コートについたら絶対に
落ちないタイプの

スミを吐くタコを乗せた車がー！～」

「ー！～やばい、これはやばい！～」

正登はそう言つと、ひたに向かってぐるタコがコートに墜つたらな
いよつに氣をつけて

左足でタコを蹴つて荷台に戻し、傾いていた車を元に戻した。

正登は思った。

「いかん・・・なにやら汚してしまったうな予感がする。

これはとりあえず他の場所へ移動しよう・・・」

正登は他の場所へ移動したが、どこかに行こうとしたとき

運悪く潮見高校の友達に会つてしまつた。

「おおー、正登じゃーん。久しぶりーー」

「あ、皆！…どうしたの！？」

「おお、今日な学校休みだつたんだよ。こんなとこで話すのもなんだから

あのレストラン行こうぜ！…！」

「あ・・・うん・・・」

嫌な予感はしたがとめられない正登であつた・・・。

案の定いろんなものを食べて、お金は正登が全額払うことになつた。

現在のお金：20万円。

「なんか一気に10万円も減つたけど残りは大事に使わないと・・・
とりあえずどこかにいくか・・・。そうだ！…九十九里浜にでもい
くか！

あ、その前に携帯買いにいかなくちゃ…！」

そう一人でつぶやくと携帯を買いにいった。

その30分後、正登は携帯の機能を試していた。

「せつかくだし、いいの買つちゃつた。

へー、今時はデジカメよりきれいに撮れるんだ。ふーん音楽も聞
いたりできるのか～
それにアドレス帳の件数が千件だつてこりやす～」いや。

でも僕のつて男子のより女子の方がアドレス多くなりそうだな～」

現在のお金：5万円

「よし！九十九里浜にでも行つてみるか。」
と正登は言つと九十九里浜へ向かつた。

その頃、ここは三千院家の屋敷の近く。そこに3人組の男達がいた。

ずっと三千院家ほうをむいていた。

「兄貴、あそこが例の三千院家ですかー!？」

「ああ、そうだ。ここの中じやがつは前に俺の部下をロケにしやがつた許さねえ。ハツ裂きにせんやがる。」

「そして、金を奪うんですね」

「ああ、そうだ。みていろお前ら、もつ俺の頭の中じや完璧な作戦が出来上がってるぜ」

こいつらは誰なのか?はたしてなにをしようといつのか?完璧な作戦とは?

バカなやつらの作戦ほど怖いものはない。。。

そんなことが裏で行われようとしているのはつい知らず

正登は九十九里浜へと来ていた。

「うーん、気持ちがいいなあ。ここに田つて一番好きだなあ。リラックスできるしね!!」

正登はしばらく海を見ていたがなにやら自分に声をかけられていると気づいて

周りを見た。しかし、そこには誰もいない。。。正登はまた海の方向に向きをかえて

眺めていると、また聞こえていることに気づき今度は周りを見てもいなかつたので

周りを探してみると、しかし、どこにもいないので、また戻ろうとした。

その時、ふとコートのポケットに手を入れると、なにかボタンみたいなものが見える。

「ん?なんかはいってるな。。。なんだこれ?」

それはボタン型の丸いものだつた。しかもなにか声がしている。正登は耳を近づけて聞いてみると、マコアの声がした。

「マ・・・マリアさん!？」

「あ、よつやく聞こえましたね。正登くん」

「なぜ、マコアさんが?ていうかこのボタンみたいななんですか

！？』

「それは盗聴器です。それよりナギが大変なこと……」「盗聴器ってなんですか？しかもお嬢さまになにかあつたんですか？」

「え……ナ……が……た」

「え？ なんですか？……聞こえませんがとにかくそちらに向かいます！！！」

正登はすぐに屋敷へと戻った。屋敷に戻ると玄関に峻がいた。

「峻さま、一体お嬢さまになにがあつたんですか？」

「正登、こちへ来てくれ」

「は」……峻さま

峻に連れられ正登はナギの部屋へと向かう。ナギの部屋には泣き崩れるマリアを支えるヒナギクがいた。一体なにがあつたのだろ？と思つてゐるところ

峻がこゝう言つた。

「実はナギが熱をだして倒れたんだ。医者に見てもうつたが原因が分からぬらしい。

俺もまだナギを見てないからなにかはわからんがな」「では一緒に見てみましよう」

「ああ、そのつもりだ」

と言つと正登と峻はナギが寝かされてる部屋に入つていった。入つた瞬間、正登は気づいた。

「（な……なんだこの薄暗く漂つてゐる空気……いや雰囲気は）

そう思いながらナギの前に着くと、じょりく見ていたが峻が聞いてきた。

「どうだ正登、なにかわかつたか？」

「ええ、確信はありませんが」

「本当か！？」

「あくまでも確信はありませんがね。それより確か……鷺ノ富さんって除霊退治ができましたよね」

「ああ、できるがそれがどうした？」

「鷺ノ富さんを呼んでください」

「なに？どういうことだ」

「まだ確信はありませんが、とにかく理由は鷺ノ富さんがきてから話します

それと一回ここから出ました」

「ああ、もうだな。わかった」

それから数分後、電話をかけていた峻が戻ってきた。

「正登、伊澄はすぐにこちらに来るそうだ。それと咲夜と和哉も一緒にいたから

一緒に来るそうだ」

「では紅茶は買ってくるの忘れたので、僕がコーヒーを入れてきます。

何分ぐらいで着くつていつてました？」

「あと5分ぐらいで着くそうだ」

「分かりました。ではコーヒーを入れてきます

その5分後伊澄達が到着し、正登が用意したコーヒーを飲んでいた。
「で、なぜ私を呼んだんですか？」
「それはナギの友達やからやろ」
「それもそうですが、ちょっと見てもらいたいものがあります……。
・。
峻さま、鷺ノ富さんこっちに来てください」
「ええ、わかりました」

と並んで正登は伊澄を連れてナギが寝かされている部屋へと向かった。

「えーと、私だけをまず来させたということは靈関係の方ですか？」

「ええ、まさしくそうです」

「なに？ ナギに靈が憑いているのか？」

その言葉に峻も過敏に反応した。

風邪でも心配しているのに靈が憑いているとなればなおさらだろ。 「まあ、まだ確信はないので・・・分かりませんが、 とりあえず見ていてください」

そういうと、3人は部屋の中へと入っていった。

入つてすぐナギの前に行くと、伊澄は

「これは間違いない靈が憑いてますね。 それもかなり強力な悪靈です」

「そうですか・・・。 では除靈できますか？」

その言葉に伊澄は頷き札をだして除靈を試みたがなんの変化もなかつた。

「すみませんかなり強い靈のようですね。 今持つている除靈の札では無理みたいですね。 しかし、もう夜遅いですし除靈の続きを明日にしましよう」

「ああ、そうだな。 そういうばもう9時なんだな。 そろそろ戻るか。 それにしても、これをマリアが知つたらどうなるんだろうな・・・」 峻がそう言つと、正登は確かにそうだなと思つた。

マリアは風邪だと思つていてるのに靈に憑かれているなんて知つたらどうなることだろ。 と、正登はそう思いながら2人に言つた。

「とりあえずマリアさんたちにはなにも言わないことにしましょ。」

その言葉に2人も頷いた。

3人は他の皆がいる部屋に戻つた。 その後咲夜たちもナギのお見舞

いをして

皆寝ることにした。正登もマリアや伊澄、咲夜たちが寝るのを確認して自分の部屋に戻つてベッドに入つたがなぜか眠れなかつた。なぜかといふと正登の頭からあの事が離れなかつたのだ。一体なにがあつたのだろうか？

15話（後書き）

久し振りの投稿です。

修学旅行や部活などあまりすみませんでした。
なるべくはやくできるよう努力したいです。

御意見・御感想お待ちしています

え～今回このような処置をしたかとこうと理由はまつほほ～あります

なぜ今回このような処置をしたかとこうと理由はまつほほ～あります

1つ目・・・

一度自分の小説読み返してみたところ
もう少しいい小説が出来るのではないかと思つたから・・・

二つ目・・・

最近なにかと忙しくての折で怪我をして1回生活のリズムを
変えてみるのも悪くはないかなと思つたから・・・

3つ目・・・

今回わらに新しい小説を2つほど投稿する上に
内容をリンクさせたほうが面白いのが
出来るかもと思つたから・・・

以上の思いから作者の勝手ですがこの小説を打ち切つて
新しく構成させていただきます。

（面白くなるかどうかはわかりませんが・・・）

なおしじばら～ネタを構成するのに時間がかかるかもしないので

新しい小説がいつできるかわかりません。
出来次第投稿させていただきたいと思います。

以下の文字は文字数が足りなかつたので
その対処です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7697d/>

執事ハヤテの日々

2010年10月10日14時57分発行